安重根

——十四の場面——

林不忘

青空文庫

時。一九〇九年八月、十月。

所。小王嶺、ウラジオストック、ボグラニチナヤ、蔡家溝、ハルビン。

人。安重根、禹徳淳、曹道先、劉東夏、劉任瞻、柳麗玉、李剛、李春華、朴鳳錫、白基竜、鄭吉炳、卓連俊、張首明、お光、金学甫、黄成鎬、黄瑞露、金成白、クラシノフ、伊藤公、満鉄総裁中村是公以下その随員、ニイナ・ラファロヴナ、日本人のスパイ、売薬行商人、古着屋の老婆、ロシア人の売春婦、各地の同士多勢、青年独立党員。

蔡家溝駅長オグネフ、同駅駐在中隊長オルダコフ大尉、同隊付セミン軍曹、チチハル・ホテル主人ヤアフネンコ、露国蔵相ココフツォフ、随行員、東清鉄道関係者、露支顕官、各国新聞記者団、写真班、ボウイ、日本人警部、日露支出迎人、露支両国儀仗兵、軍楽隊、露国憲兵、駅員。

（朝鮮人たちはルバシカ、背広、詰襟、朝鮮服、蒙古服等、長髪もあり、ぐりぐり坊主

もあり、帽子なども雑然と、思い思いの不潔な服装。日清露三国の勢力下にある明治四十二年の露領から北満へかけての場面だから、風物空気、万事初期の殖民地らしく、猥雑混沌をきわめている。多分に開化風を加味しても面白いと思う）

1

一九〇九年――明治四十二年――八月下旬の暑い日。
ウラジオストックの田舎、小王嶺の朝鮮人部落。

部落の街路。乾割れのした土塀。土で固めた低い屋根。陽がかんかん照って、樹の影が濃い。蝉の声がしている。牛や鶏の鳴く声もする。蝉はこの場をつうじて片時も止まずに啼きつづける。

安重根、三十一歳。国士風の放浪者。ウラジオの韓字新聞「大東共報」の寄稿家。常に読みかけの新聞雑誌の類を小脇に抱えている。左手の食指が半ばからない。ほかにこの場の人物は、老人、青年、女房、娘、子供等、部落民の朝鮮人の群集と、売薬行商人など。

樹の下でルバシカ姿の安重根が演説している。男女の朝鮮人の農民が、ぼんやり集まって、倦怠(けんたい)そうに路上に立ったりしゃがんだりしている。みな朝鮮服で、長煙管(ながぎせる)をふかしている者、洋傘(こうもり)をさしているものもある。

安重根　（前からの続き）そういうわけで、百姓は農業にいそしみ、商人は算盤(そろばん)大事に、学生は勉強をして、めいめい本分とする稼業に精を出すことが第一です。この、韓国民の教育をはかるという大目的のために、また一つには、私は本国の義兵参謀中将ですから、こうしてこの三年間、国事に奔走(ほんそう)しているのであります。私の国家思想は、数年前から持っておりましたが、非常に感じましたのは、四年前、日露戦争の当時からであります。それから以後になって五カ条の日韓条約が成立し、なお続いて七カ条の条約が締結されました。これを機会に私は故国(くに)を出て、この露領の各村落を遊説して来たのであります。

聴衆の大部分は聞いていない。あちこちにグループを作って、世間話をしたり、ささやき合ったりしている。一隅で欠伸(あくび)する者がある。

安重根　そうすると、韓国の前途について、どういう風にしなければならないか。私の考えを

申しますれば、千八百九十五年の日露開戦に際して、日本皇帝陛下の宣戦の詔勅によれば、東洋の平和を維持し、かつ韓国の独立を鞏固ならしむるという御趣旨であったから、その当時韓国人は非常に感激いたしまして、とにかく日本人のつもりで日露戦争に働いた人も尠からざることで、日露の媾和が成立して日本軍が凱旋することになりました時のごときは、韓国人は自国の凱旋のごとくに喜んで、いよいよこれから韓国の独立が鞏固になると言っておりましたところが、その後伊藤公爵が韓国の統監として赴任して以来、前に申しました五カ条の協約を締結しましたが、それはまったく先に宣言せられた韓国の独立を鞏固ならしむるという意に反しておりましたために、尠からず韓国上下の感情を害して、それに対し不服を唱えておりました。のみならず、千八百九十七年にいたりまして、またもや七カ条の協約というものが締結されましたが、これも先の五カ条と同様、韓国皇帝陛下が親ら玉璽を鈐せられたのではなく、また韓国の総理大臣が同意したものでもない。じつに伊藤統監が強いて圧迫をもって締結されたのであります。

聴衆は無関心に、じっとしている。眠っている者もある。

安重根　でありますから、この条約に対して、韓国人はことごとくこれを否認し、ついには憤激のあまり――。

若い女が頭に水甕を載せて出て来る。地面に胡座をかいている青年一が呼び停める。

青年一　水か。待ってた。飲ましてくれ。
女　冗談じゃないよ。お炊事に使うんだから。
青年一　咽喉が乾いて焼けつきそうなんだ。
女　勝手に井戸へ行って飲んで来たらいいじゃないの。
青年一　ちっ！　面倒くせえや。わざわざ起って行くくらいなら我慢すらあ。
　傍らから青年二が女の甕を奪って飲みはじめる。女は争う。

女　いけないったら、いけないよ、あらあら！　こぼして――。
青年二　因業なこと言うなよ。新しいの汲んで来てやったら文句はないだろう。
　飲みつづける。青年一をはじめ、二三人集まって、甕を廻して飲む。笑声が起る。この間も安重根は続けている。

安重根　（一段大声に）憤激のあまり、この事情を世界に発表しようとするくらいにまで覚悟しておりました。もともとわが韓国は四千年来武の国ではなく、文筆によって立ってきた国です。
　子供が出て来て安重根の前に進む。

子供　（手を出して）小父ちゃん！　仁丹ある？　ひとふくろ。
安重根　（子供を無視して）この国家的思想を鼓吹（こすい）するために――。
子供　小父ちゃん！　お母（つか）ちゃんがね、仁丹おくれって。お銭（ぜぜ）持って来たよ、これ。
安重根　（子供に）小父ちゃんは薬売りじゃないよ。さ、あっちへおいで――私はこの国家的思想を鼓吹するために煙秋（エンチユウ）、水青、許発浦、サムワクウ、アジミイなどこの近在の各地を遊説しているものでありますが、国権を回復するまでは、農業にまれ商業にまれ、おのおのその天賦の職業に精励して、いかなる労働も忍んで国家のために尽さなければならない。また場合によっては、戦争もしなければならないのであります。
　遠くから声がする。
声　貞露！　貞露！――しようがないねえ。どこ行ったんだろう、洗濯物を持ったまんま。
　群集の中から、濡れた洗濯ものを持った女が逃げるように、塀にそって急ぎ足に去る。
　男の一人が見送る。
男　おい。貞さん、今夜行くぜ。
女　馬鹿お言いでないよ。

笑声。眠っている者はびっくりして眼を覚ます。

安重根　伊藤統監の施政方針はどうしても破壊しなければならない。そのためにはどういうことでもしなければならぬ。若い者は戦争に出て、老人は自分の職業に従事して兵粮や何かの補助をし、子供に対しては相当の教育を授けて第二の国民たる素養を造らねばならぬということを、私は力説したいのであります。

売薬の名を大きく墨書した白洋傘（こうもり）をさして、学童の鞄を下げた朝鮮服の男が、安重根と反対側に立って大声に言いはじめる。

薬売り　（鞄から蛇の頭を覗かせて）そうら！　蛇だぞ！　ははははは、驚いてはいけない。蛇というとすぐ顔色を変える人がある。ところが、この蛇というやつはまことに可愛いもので、おまけにただ可愛いだけではない。人間さまにとってこれほどありがたい生き物はないんだが、どういうものか毛嫌いする人が多いようです。もっとも、こいつ、あんまり感心した恰好ではないからね。

群集はかすかに興味を示して、薬売りの周囲へ集まって行く。安重根は手持ち不沙汰に立っている。

薬売り　なに、蛇なんざあ珍しくねえ？　そこらの藪っぺたを突っつけばいくらでも飛び出す？　だだ誰だ、そんなこと言うのは――ちぇっ！　そりゃあ夏の蛇だ。夏の蛇ですよ。そんな蛇とは蛇が違う。ねえ、夏の蛇は薬にはならないよ。私がこう言ったら、そんならお前の蛇は何かの薬になるのかと訊いた人がある。なあ、これから九月、十月、十一月もなかばになると、満洲の冬は早いです。名物の空っ風が、ぴゅうっ、ぴゅうっ、ねえ、朝起きてみると、白いものが地面に下りて、霜だ。おお寒い寒い！　皆さん手に息を吹っかけて、家ん中へはいってオンドルの上に縮こまる。へへん、笑いごっちゃあねえ。蛇だって寒いから、穴籠りだ。山の奥へと持って行って穴を掘って、蛇の先生、飲まず食わずでじいっ――冬眠してやがる。ね、そこを、私らみてえな蛇屋さんが、へん、商売商売だね、竹の棒で起こして廻るんだが、どっこい、どの山の蛇でもいいかと言うと、そうではない。これから北へ行って金崔浩さんの所有山、南では車錫山、まず大した蛇山だねえ。蛇追いと言って、これから蛇を追い出して油を取る。御存じの支那の竜門から産ると言われていた視力若返りの霊剤、あれなんかもじつはこの満洲蛇の油だということが、最近偉い博士先生方の御研究によって判明をいたしました。何にきくかと言うと――眼の悪い人はいないかね？　眼の悪い人は前へ出なさい。老眼、近眼、あるいは乱視といって物がいくつにも見える。捨てて置いてはいけない。それから脳病一般、リュウマチス、それに喘息だ。この喘息という病は、今日の医学界ではまだその病源についていろいろと説があって、したがって治療法も発見されておりません。学者先生が多勢お集まりになっ

て、腕を拱んで首を捻っていなさる。はて、わからねえ――。

薬売りは腕を組んで、首を捻って考え込む態をする。群集はすっかり安重根に背中を向けて、薬売りを取りまいて熱心に聴き入っている。低い塀の上にも、中から覗いている顔がいくつも並んでいる。安重根は憮然として群集を凝視めている。

2

同年十月十七日、午前十時ごろ。

ウラジオストック、朝鮮人街、鶏林理髪店の土間。罅のはいった大鏡二つ。粗末な椅子器具等、すべて裏町の床屋らしき造り。入口に近く、卓子腰掛けなどあって、順番を待つ場所になっている。正面に住いへ通ずるドア。日本郵船のポスタア、新聞の付録の朝鮮美人の石版画、暦など飾ってある。

禹徳淳――煙草行商人。安重根の同志。四十歳。

張首明――鶏林理髪店主。日本のスパイ。

お光――張首明の妻。若い日本婦人。

他に、安重根、下剃り金学甫、客、近所の朝鮮人の男、ロシアの売春婦二人、日本人の

スパイ。

椅子の一つに安重根が張首明に顔を剃らしている。もう一つの椅子にも客がいて、金学甫が髪を刈りて終ろうとしている。入口に近い腰掛けにロシア女二人と近所の男が掛けている。

女一　（髪を束ね直しながら）さ、お神輿を上げようかね、朝っぱらから据わり込んでいても、いい話もなさそうだし――。

女二　あああ、ゆうべは羽目を外しちゃった。

近所の男　（女一へ）この人の旦那ってのは、まだあの、鬚をぴんと生やして、拍車のついた長靴を引きずってる、露助の憲兵さんかい。

女一　やあだ。そうじゃないわよ。あんなのもう何でもないわねえ。今度の人は――言ってもいいわね。日本人の荒物屋さんよ。

男　へっ、日本人か。

女二　あ、そうそう。今日か明日、また日本の軍艦が入港るんですって。港務部へ出てる、あたしの知ってる人がそ言ってたわ。

女一　あら、ほんと？　大変大変！

男　そら始まった。大変はよかったね。日本の水兵が来ると言うと、すぐあれだ。眼の色を変えて騒ぎやがる。

張首明　（安重根の顔を剃りながら）情夫（いろおとこ）でも乗ってるというのかい。

奥へ通ずる正面のドアから張首明妻お光が出て来る。

お光　情夫ですって？　面白そうなお話しね。（一同へ）あら、いらっしゃい――日本の水兵さんは、みんなロシア娘の情夫（いろおとこ）なんですとさ。

近所の男　どこがよくてそう日本人なんかに血道を上げるんだろう。気が知れねえ。

お光　おや、ここにも一人日本人がいますよ、ははは。

髪を刈っている客　（金学甫の椅子から）そうだ。日本人と言えば、ハルビンは騒ぎのようだね。ロシアの大蔵大臣のココフツォフとかいう人が来て、日本の伊藤公爵を待ち合わせるんだそうだ。

張首明　伊藤公爵って、この六月まで韓国統監をしていた伊藤さんかね。

女一　さよなら。

女二　あたしも行こう。油を売っちゃいられないわ。

近所の男　張さん、じゃまた、後で来るぜ。

張首明　そうかい。もうすぐだがね。

女三人と近所の男は、張首明夫婦に挨拶して去る。入れ違いに、よごれた朝鮮服に鳥打帽をかぶり、煙草の木箱を抱えた禹徳淳がはいって来て、安重根とちらと顔を見合って腰掛けに坐る。張首明は素早く二人を見較べる。

お光　（張首明へ）あら、煙草まだあったわね。

禹徳淳　煙草じゃありませんよ。髪刈りに来たんですよ。

髪を刈っている客　伊藤さんは今度帰ると、満洲太守という位につくんだという評判だよ。

張首明　そうですかね。豪勢なもんさね。それで、なんですかい、ハルビンへおいでになるのは、その瀬踏みってわけでしょうかね。なんだか満鉄の整理に見えるとかって聞きましたが——。

客　そんなこともあるかもしれない。中村とかいう満鉄の総裁が一緒に来るそうだから。

金学甫　（客を済まして）一服おつけなさいまし。

張首明は安重根と禹徳淳へそれとなく注意している。

お光　金ちゃん、お前、朝御飯まだだったね。（張首明へ）あんたも、ちょっと待っていただいてすましちまったらどう？

客　ここへ置きますよ。

代を残して去る。張首明は安重根と禹徳淳に会釈し、お光、金学甫とともに、三人正面のドアから奥へはいる。禹徳淳は、安重根と並んで空き椅子に腰掛けて、しばらく双方ともじっと動かず黙っている。

安重根　（低声に）手紙見たな。

禹徳淳　言って来たとおり調べてある。二十四日の晩の汽車らしい。

安重根　今もここにいた客がその話をしていたが、（考えて）夜か――。

禹徳淳　二十三日に寛城子を出発するそうだ。ハルビンのほうは、情報を集めるように曹道先に電報を打っておいた。遼東報にも大東共報にもかなり詳しく報道されているが、まちまちでねえ。李剛さんに会ったか。

安重根　まださ。いま着いたばかりだよ。君と打ち合わしておいたとおりに、すぐここへやって来たんだが――しかし、なあ徳淳、おれは考えたよ。じつは、すこし考えたことがあるんだ。

禹徳淳　夜着くというのが心配なんだろう。それはおれも、全然考えないじゃない。まったく、夜はいっそう警戒が厳重だろうから――だが、それだけまたこっちにしてみれば、昼よりは紛れ込むに都合がいいわけだからねえ。

安重根　そんなことじゃあないんだ。会って話さなけりゃわからないことだから、手紙には書

かなかったが、（笑って）会って話したところで、君は人の細かい気持ちなど解る人間じゃあなかったね。

禹徳淳　（熱心に）君は何を考えているか知らないが、君がウラジオへ出て来ると決ってから、同志の熱狂ぶりは大変なものだ。まるで救世主の再臨を待つように騒いでいる。どこから聞き出したか、下宿の連中まで知っていてねえ、今日来るそうだがどこで僕と落ち合うことになっているかとうるさく訊くじゃあないか。（戸外を見て）ひょっとすると、探しに来るかもしれないぜ。

安重根　救世主だ？　馬鹿な！　君までそんなことを言う。だから君には、僕の心持ちは解らないというんだ。

禹徳淳　じゃあ、考えているって何を考えているんだ。

安重根　（半ば独り言のように）ハルビンへ行くよ。なあ、ハルビンへ行こう――。

禹徳淳　もちろんだとも。今になって計画を中止するなんて、そんなことは考えられない。期待に燃えている同志をはじめ、ここまで突き詰めているおれのことも考えてくれ。

安重根　（気軽な調子で）だからさ、行くよハルビンへ。行くと言ってるじゃないか。（急に述懐的に）三年間――長い三年だったなあ。

禹徳淳　そうだ。長い三年だった。

安重根　三年の間、おれは故郷（くに）の家族に一度も会わずに来た。

禹徳淳　（吐き出すように）何だ、そんなことを言ってるのか。
安重根　話したかしら――おれが十六の時、十七の家内を貰ったんだよ。もう三十二のお婆さんだ。子供が三人あってねえ、女一人男の児が二人さ。
禹徳淳　（うるさそうに）聞いたよ。みんな達者にきまってるよ。それより、黄成鎬のところへは、今日行くと報せてあるのか。
安重根　徳淳、君あ趙康英（ちょうこうえい）という人を知っているかね？
禹徳淳　趙康英？　聞いたことがある。煙秋（エンチュウ）の田舎の下里で戸籍係をしている男だろう？
安重根　今じゃあ出世してねえ、ポグラニチナヤの税関の主事をしているよ。
禹徳淳　君、早く李剛主筆に会ったほうがいいぜ。一緒に行こう。
安重根　（しんみりと）やはり故里（くに）の人間でねえ、僕んところから三里ほどしか離れてないんだが、今度休暇を取って、ちょっと帰国（かえ）るんだそうだ。それで、手紙を出して頼んであるけれど、僕あポグラニチナヤへ行って、よく相談しようと思っている。故里（くに）のほうに都合がついたら、趙君に面倒を見てもらって、帰りに、ハルビンまで家族（うち）のやつらを伴れて来てもらうつもりだ。旅券の関係で、ウラジオへ呼ぶということは厄介だからねえ。
禹徳淳　（驚いて）ほんとに君は、その用でハルビンへ行くのか。
安重根　そうさ。僕はハルビンで、三年振りに妻や子供に会うんだ。
禹徳淳　何を言ってるんだ――。

安重根　（希望に満ちた様子で）金成白ねえ、君も知ってるだろう？　あの金成白の店から、品物を融通してもらって雑貨商でもはじめて、多分、ハルビンに落ち着くことになるだろう。

禹徳淳　（考えたのち笑い出して）ははははは、おれにまで、ははははは、おれにまでそんな用心をしなくてもいい。

安重根　まったく、考えてみると、お互い下らないことに向気になってたもんさ。こうして外国に出て不自由をしながら、国事だとか言ってみたって始まらないからねえ。同じ苦労するなら、女房や子供を呼んで、すこしでもうまい飯を食わせるように苦労してみる気になったよ——。（笑う）

間が続く、禹徳淳は沈思している。急に憤然と椅子を起つ。

禹徳淳　安君——。

奥に大きな話し声とともに正面のドアがあいて、楊子をくわえた張首明が出て来る。立っている禹徳淳を見て驚く。

張首明　おや、お帰りですか。

禹徳淳　（狼狽して）急な用事を思い出したんです。後で来ます。

張首明　そうですか。どうもすみません。お急ぎじゃないと思って、ちょっと飯をやってたも

んだから――。

禹徳淳はじろりと安重根を見て、考えながら出て行く。張首明は再び安重根を刈りはじめる。長い間。

張首明　ははは、飯を食っててお客を逃がしちゃった。しかし、腹が減っちゃあ軍はできませんからね。

安重根　まったく。

張首明　旦那は鎮南浦の方ですね。

安重根　（ぎょっとして）どうしてわかる。

張首明　どうしてって、言葉の調子でわかりまさあ。

安重根　そうですよ。鎮南浦の安重根というんです。

張首明　ここの新聞社の社長さんも鎮南浦の方ですね。李剛先生っていう、御存じですか。

と表てに気を配る。戸外に、そっと金学甫が案内して、日本人のスパイが来ている。背広服、紳士体の男。安重根は張首明の様子でそれと気づき、何気なく装う。お光が正面の戸を細目に開けて覗いている。

スパイ　（はいって来る）こんちわ。空いてるかね？

安重根　（大声に）そうだ。その李先生に伝言を頼もう――。

スパイ　ここへ坐るかな。

空き椅子に腰を下ろす。

張首明　どうぞ――。（奥へどなる）金公！　何してやがるんだろうな。お客さまだぞ。

金学甫が裏から廻って出て来る。安重根は続けている。

安重根　（なかばスパイに）たいした用じゃあないよ。ただ李って人はよく知らないでね、一つ僕を君の友達ということにして、紹介する意味で言っておいてもらいたいんだが――。

スパイは金学甫と談笑しながら、安重根の言葉に聞耳を立てている。

3

同じくウラジオストック。鶏林理髪店付近の場末の民家屋根裏、朝鮮字新聞「大東共報」社。編輯局兼印刷工場。同時に主筆李剛夫妻の住居でもある、大東共報社のみすぼらしい全部だ。

片隅に壊れかかった寝台。傍らの壁には衣類など雑然とかかり、床は、食器炊事道具など散乱し、おびただしい洋書、新聞紙の類が山積している。反対側にささやかな植字台、旧式の手刷りの印刷機、その他の器具必要品など乱雑に置かれて、中央に李主筆の大机、それを取りまいて古びた椅子四五脚。

正面に小窓二つ。下手に耳戸（くぐり）のような扉（ドア）。ドアを開けると急傾斜の階段の上り口が見える。窓を通して、人家の屋根、ニコライ堂、禿山などのウラジオ風景。遠くに一線の海。

壁は、露語と朝鮮語の宣伝びらや、切抜きや楽書でいっぱいだ。漢字で「八道義兵」、「大韓独立」、「民族自決」と方々に大書してある。正面の窓の間に旧韓国の国旗を飾って、下に西洋の革命家の写真など懸っている。天井は低く傾き、壁は落ちかかり、すべてが塵埃と貧窮と潜行運動によごれきった、歪んだ屋根裏の景色。

前場と同日、十月十七日の夕刻。二つの窓から夕焼けが射し込んで、室内は赤あかと照り映えている。

李剛――五十歳。大東共報主筆。露領の朝鮮人間に勢力ある独立運動の首領。親分肌の

学者で、跛者(びっこ)だ。すっかり露化していて、ルバシカに、室内でも山高帽をかぶっている。
李春華――李剛の若い妻。
柳麗玉――ミッション上りの同志で安重根の情婦。ロシアの売春婦のような鄙びた洋装。二十七歳ぐらい。
卓連俊――老人の売卜乞食。
朴鳳錫――大東共報記者、青年独立党員。
鄭吉炳――安重根の同志。独立運動の遊説家。
クラシノフ――亡命中の露西亜革命党員。李剛の食客。他同志一、二。

李春華は一隅で、石油の古罐に炭火をおこして粥を煮て、葱(ねぎ)の皮をむいている。傍で卓連俊がその手伝いをしながら、生葱を食べている。クラシノフは、中央の机に腰かけて露語新聞を読み、鄭吉炳は箒でそこらを掃き、その間を李剛は、何か呟きながら探し物の態で、部屋じゅう跛足を引いて歩き廻っている。隅の卓子で、柳麗玉が手紙を書いているのを、朴鳳錫は印刷機を掃除しながら、ちらちらとその手許を覗く。

柳麗玉　（手で、書いている紙片を覆って）お止しなさいよ、覗くの――人の書いてるものや

読んでるものを覗くのは、失礼よ。

朴鳳錫　おや！　まるで公爵家の家庭教師の言い草だ。ははあ、恋愛は昔から多くの惜しい同志を反動家にして来た。してみると、それは安さんへ書いているんですね。しかし、安さんなら、もうこのウラジオへ来てるはずですよ。

鄭吉炳　（箒をとめて）十七日にはそっちへ行くという、煙秋（エンチユウ）から出した安さんの手紙が先生んとこへ届いたのは、いつだったっけな。一昨日（おととい）でしたね、先生。

李剛　（歩きながら）そうだ。

朴鳳錫　（誰にともなく大声に）おい！　白基竜はどうしたんだ。安さんは、今朝早くやって来る予定なのに、こう夕方になっても顔を見せないから、おおいに歓迎しようと待ち構えていた同志たちは拍子抜けがして、ああやってたびたび訊き合わせに来るし、今度は、李先生まで心配して、さっき黄成鎬の家へ白基竜のやつを様子見にやったんだが――。

柳麗玉　ええ。安さんはウラジオへ出て来れば、黄成鎬さんとこへ泊るにきまっていますけれど、今度だけはあたし、まっすぐここへ来るはずだと思うわ。先生はじめ同志の方が、皆こんなに待っていることは、安さんだって知っているんですもの。

卓連俊　待ってるのあ、仲間や先生だけじゃあるまいってね。

李春華　お爺さん、しょうがないね。そうやって剥（む）く傍から葱を食べちまって。それより、水をいっぱい汲んで来ておくれよ。

卓連俊はバケツを提げてドアの階段口から降りる。

李春華　（李剛へ）あなた、何をさっきからうろうろ歩き廻っているんです。また探し物ですか。

李剛　うむ。君は知らないかな。今朝衛生局から廻って来た通知書なんだが、あれに、この辺の種痘は何日から始めるとあったか覚えていないか。

李春華　さあ。私はよく見もしませんでしたけれど、あれなら、今し方鄭さんが読んでいたようですよ。ねえ鄭さん、ほら、市庁から来た青い紙。どこへやって？

鄭吉炳　どこだったか、そこらへ置きましたよ。ありませんか。

李剛　見つからなくて弱ってるんだ。明日の新聞にちょいと書いといてやろうと思うんだが——。

クラシノフ　ねえ。李さん。ハルビンのノウワヤ・ジイズニ新聞がこんなことを言ってる。（読み上げる）「今回当地における伊藤公とわが北京公使ならびに大蔵大臣ココフツォフとの会見につき、本社は確かなる筋より左のごとき説話を聴けり。今回の会見は、満洲における日露両国の地位に関し、過般来日清露間に継続したる談判の結果にして、決して偶然の出来事にあらず。ポウツマス条約は単に紙上に締結せられたるのみ。これが実行の場合、全局の政策と衝突するの点尠しとせず。ことに北満における日露の商工的利害に関し最も然りとなす。しこ

うして清国はこの間に立ちて独り漁夫の利を占めつつあるなり。」――とこう言うんだが、この新聞は社会党の機関紙だ。社会党のやつらまで、急にこんなに関心を持ち出したところを見ると、やっぱり噂どおり、伊藤とココフツォフはハルビンで会うことに確定してるんだな。

李剛　（まだ探しながら）そんなことより、こっちは植え疱瘡の通知書だ。近いうちに、市の医者がこの近所へ出張して来て、種痘をすると言って来たから、その期日をだしておかなくちゃあ――未来の労働者と兵隊がみんな疱瘡に罹って死んでしまったら、プリンス伊藤もココフツォフも困るだろう。

柳麗玉　あ、これじゃありませんか。何だろうと思って、今も見ていたんですけれど、気がつきませんでした。

と自分の卓子の上から青い紙片を取って李剛に渡す。李剛は中央の大机に帰って、通知書を参考しながら原稿を書き出す。同志一と二があわただしく駈け上って来て扉から顔を出す。

同志一　安重根さんは来ていませんか。

同志二　たしかに今朝ウラジオへ着いたらしいんですが――。

鄭吉炳　（むっとして）何度来たって、いないものはいませんよ。こっちでも、あちこち心当りのところへ人をやって探してる最中なんです。

朴鳳錫　（戸口へ進みながら）君らは、今朝からそうやって入りかわり立ちかわり安君を探しに来るが、僕らが安君を隠しているとでも思ってるのか。

同志一　（鄭吉炳へ）そうですか。（独言のように）変だなあ――けさ着いたまではわかってるんだが、すると、それからどこへ廻ったんだろう？

同志二　（朴鳳錫へ）いや、そういうわけじゃありません。あんまり皆が待ってるもんだから、じっとしていられなくて、ことによると、もうここへ来てるかもしれないと思って来てみたんですが――そうですか。じゃあ、また――。

二人は急いで降りて行く。

朴鳳錫　変だなあ実際。安君はいったいどうしたんだろう？

李剛　（気がついたように）白基竜はまだ帰らないか。朴君、窓から見てごらん。

朴鳳錫　自転車で行ったんですし、それに、そんなに遠いところじゃなし、もうとうに帰ってなくちゃならないんですが、（正面の窓に立って下の往来を覗き、すぐ背伸びして遠くの港を見る）船が入港（はい）って来た。軍艦らしい――そうだ。日本の軍艦だ。

クラシノフ　（舌打ちして）またか。今にぞろぞろ日本の水兵が上陸して来る。そうすると、ここらの露路うらから、化物のように白粉を塗りまくったロシアの女房たちが、まるで革命のように繰り出して行って、桟橋通りを埋めつくすのだ。そして、街全体は瞬く間に、唄と笑い

と火酒（ウオッカ）の暴動だ。ははははは、女たちの仕事は、実行の上で、僕らよりずっと国境を越えているんだからかなわないよ。

李春華　ロシアの女ばかりじゃああありませんわ。このごろでは、この辺の朝鮮の女まで、日本の水兵と聞くと、眼の色を変えて騒いでいますわ。

　李剛は、これらの話し声をよそに、机上に頬仗をついてパイプをふかしながら、凝然と考えこんでいる。窓の残光徐々に薄らいで、この時は室内に半暗が漂っている。

柳麗玉　（書き物を続けながら）いいじゃああありませんか。何もできない人は、そんなことでもして、日本人からうんとお金を搾（しぼ）ってやるといいんだわ。

　卓連俊が、水のはいっているバケツを提げて、あわただしく上って来る。

卓連俊　（戸口に立ち停って階下を見下ろす）どうもいけ図々しい野郎だ！　角の床屋です。いけねえって言うのに、どんどん上って来やあがる――。

朴鳳錫　（ドアへ走って）角の床屋？　角の床屋って、あの、スパイの張首明か。

卓連俊　先生に用があると言って肯（き）かねえのだ。いま都合を訊いて来てやるから待っていろと言っても、あん畜生、おれを突き退（の）けるようにして上って来ようとする――や！　来た、来た！　上って来やあがった！

鄭吉炳　あいつ、俺たちに白眼(にら)まれてることを知らないわけじゃあるまい。承知の上で押し掛けて来たとすると、スパイめ、何か魂胆があるかもしれないぞ。

李春華　燈火(あかり)をつけましょうか。

クラシノフ　（不安げに立って）いやいや、暗いほうがいいです。

朴鳳錫　上げちゃあまずい。よし。どんな用か、僕が行って会ってやる。

鄭吉炳　（李剛へ）僕も行ってみましょうか。

李剛　（苦笑して）そうしてくれたまえ。朴君は喧嘩っ早いから、ひとりじゃあ心配だよ。

朴鳳錫と鄭吉炳は、ドアを出て階段を駈け降りて行く。一同じっと聞耳を立てている。

「何だ、何だ。」「何の用だ。ここは貴様の来るところじゃない！」などと二人の大声や跫音に混って、張首明の低い声が聞えて来る。

4

大東共報社の階下。民家の物置きにて、古家具、新聞雑誌、穀物の袋等積み重なり、手車なども引き込んである。そこここの床に食客たちが寝泊りするマトレスが敷いてある。下手寄りに、出入口のドアが開け放されて、街路の灯りがかすかに流れ込んでいる。正面中央に、階上の大東共報社へ昇る階段が、下から三分の二ほど見える。舞台はほとん

ど闇黒。

前の場の続き。前場の人々全部と、理髪師張首明、白基竜、安重根。白基竜は朴鳳錫と同じ若い独立党員で、大東共報記者。

正面の階段を、理髪師の白衣を着た張首明が、突き落されるように降りて来る。朴鳳錫と鄭吉炳は、階段の中途に立ち停まって足だけ見えている。

張首明　（階段の根に身を支えて）何をするんです。乱暴な！　李先生に用があるんですよ。

朴鳳錫の声　何だ。だから、何の用だと訊いてるじゃないか。

鄭吉炳の声　張さん、ここは君の来るところじゃないぜ。用があるなら、僕らに言いたまえ。先生に取り次ぐから――。

張首明　私も来たかありませんがね、伝言（ことづけ）を頼まれたから、仕方なしに来たんです。

朴鳳錫　（駈け降りて来る）こいつ！　貴様が先生に用のあるはずはない。おい、鄭君、こんなやつと真向（まとも）に口利くことないんだ。抛り出しちまおう。

鄭吉炳　（続いて駈け降りて朴鳳錫を制する）待てよ。いいから待てよ。（張首明へ）君も強

情だな。僕らが取り次ぐと言ったら、ともかくその用というのを話したらいいじゃないか。

張首明　（朴鳳錫へせせら笑って）おれの身体にさわると、大変なことになるのを知らねえか。おれは、ただの床屋の張さんじゃあねえぞ。

朴鳳錫　（鄭吉炳を押し退けようとしながら）なにを！　貴様、日本のスパイだと言いたいんだろう。同じ朝鮮人のくせに、日本人から女房と金を貰って、金斗星先生や安――。

鄭吉炳　朴君！

朴鳳錫　金斗星先生の独立運動をスパイしてやがる。こっちだって、そんなことはちゃんと知ってるんだ。てめえのような裏切者は――（鄭吉炳へ）放せ。放せよ。畜生！　張の野郎を殴り殺してやるんだ。

と鄭吉炳を振り払って掴みかかろうとする時、階段の上に薄い灯りがさして李剛の声がする。

李剛の声　（静かに）張さんですか。

張首明　（階段の上を覗いて）おや、先生。李先生ですね。へへへ、どうも、真っ暗で――。

李剛の声　張さんですね。

張首明　ちょっとお話ししたいことがあるんですが――。

李剛の声　何です。

朴鳳錫　（開け放しのドアを指して、張首明へ）二階へ上るなら、戸を閉めて来い。

張首明　いえ、こちらで結構ですよ。なにも、あなた方のように、年中秘密の相談があるというわけではなし――。

朴鳳錫　（再び掴みかかろうとして鄭吉炳に停められる）嫌なやつだなあ、こいつ。

鄭吉炳　まあ朴君、そう君のように――とにかく、先生に話しがあるといって来ているんだから、言うことだけ言わして、早く帰そうじゃないか。

張首明　安重根という人に頼まれて来たんです。

　裸か蝋燭を持って、李剛が跛足（びっこ）を引きながら降りて来ている。

李剛　（呆けて）安重根？――さあ、聞いたような名だが、よく知りません。どういう話です。

鄭吉炳　（急き込む）張さん、君はその安という人と以前から識り合いなのか。

　李春華と柳麗玉が降りて来る。柳麗玉は蝋燭を持っていて、李剛のと二本で舞台すこしく明るくなる。

張首明　以前から識りあいというわけでもありませんが、まあ、そうです。安重根さんは私たちの仲間です。

鄭吉炳　君たちの仲間――と言うと、その人も床屋なんだね？

張首明　いえ。安さんは床屋じゃああありません。

鄭吉炳　同業ではないけれど、仲間だと言うのかい。すると――。

朴鳳錫　（激昂して）解ってるじゃあないか。やっぱり安のやつ、張の一味なんだ。あいつも密偵（いぬ）だったんのだ。道理で、何だか変だと思っていたよ。第一、今日なんか、ウラジオへ着いたらすぐ、先生のところへ顔出しすべきじゃないか。それが――。

柳麗玉　（鋭く）朴さん、何を言うんです。

張首明　そのことですよ。今朝早く店へ安重根という人が見えて、髪を刈ったり鬚を剃ったりして、お正午（ひる）ごろまで遊んでいましたが、午後ちょっと買物をして来ると言って町へ出て行きました。その時、出がけに、今夜晩くなってからこちらの先生をお訪ねするからそう伝えておいてくれ、と私に頼んで行ったから、ちょっとそれを言いに来たんです。

李剛は空箱に腰かけ、一同は張首明と李剛を取りまいて立っている。顔を見合って、しばらく間がつづく。

朴鳳錫　（李剛へ駈け寄って）それごらんなさい、先生。僕は前から、安重根は怪しいと白眼（にら）んでいたんです。今朝、太陽と一しょにウラジオへ来ているくせに、正午までこんなやつのところにごろごろしていて、何を話したんだか知れたもんじゃあない。暗くなってから来るとか何とか、いい加減なことを言って、見ていらっしゃい。きっと来ませんから――でたらめな計

画を吹聴しといて、自分はスパイを稼いでやがる。来られた義理じゃあないんだ。もし来たら、この長靴のように伸ばしやる！

李剛　（沈思の態にて、静かに張首明へ）なるほど。その安重根という人は、あなたの店でいろいろ話し込んだ上、あなたに伝言を頼んで、午後町へ出て行ったというんですね。

張首明　そうです。なんだか皆さんのお話しの模様では、御存じの方らしいじゃありませんか。

朴鳳錫　そんなことは余計だ。用が済んだらさっさと帰れ。

張首明　帰れと言わなくたって帰りますよ。（独言のように）なんだか知らねえが、まるで支那祭りの爆竹みてえにぽんぽんしてやがる！

と帰りかけて、戸口からそとを覗く。

張首明　誰か来ましたよ、自転車で——あ、白さんだ。白基竜さんだ。

言いながら出て行く。この間に李春華が二階へ上って、羊燈に灯を入れて持って来て傍らの古家具の上に置く。張首明と入れ違いに白基竜がはいって来る。

白基竜　（戸口に自転車を立て掛けながら外を振り返って）今のは床屋の張ですね。不思議なお客だな。何しに来たんです。

李剛　遅かったじゃないか。安重根君はどうした。

白基竜　それが、どうも変なんです。黄成鎬さんのところへも、今日早く着くからという報せがあったそうで、あちらへもわいわい詰めかけて待っていますし、僕も、いま来るか今くるかと思って、こんなに晩くまで待ってみましたが――。

階段の上にクラシノフが現れて下を覗く。

クラシノフ　どうしたい。だいぶ大きな声がしてたようだが、床屋のやつ、もう帰ったのか。

降りて来る。

白基竜　何かの都合で一日延びたんじゃないでしょうか。

朴鳳錫　なあに、こっちにはすっかりわかっているんだ。君のいないあいだに、今の床屋の口から大変なことが露れたのだ。

白基竜　安さんのことでか？　何だ。どんなことだ。

李剛　（決定的に）朴君、私はあの張首明という人間が気になってならない。君、すぐ出かけて行って、あいつの家を見張ってみたらどうだろう、出て来たら、無論、後を尾けるのだ。

李春華　（階段を上りながら）いま熱いお粥ができましたから、皆さんでちょっとすましてから――。

李剛　（激しく）いかん、いかん！　急ぐんだ。それから白基竜君、君は停車場の待合室へ行

って、腰掛けにごろ寝している連中のなかに安重根がいないか見て来てくれたまえ。

白基竜　僕にはさっぱり解らないが、安さんがどうかしたんですか。いったい何があったんです。

朴鳳錫が促して、二人は急いで出ていく。

李春華　では、あとの人だけで御飯にしましょうか。

李剛　（いらいらして）いや。二人が帰ってから、みんな一緒に食おう。

鄭吉炳　（ばつの悪い空気を感じて）今日は十七日でしたね。

誰も答えない。開け放したドアの外を行李を抱えた安重根が通って、すぐ物蔭に隠れる。

鄭吉炳　ワデルフスキイ街に七の日の縁日がありますから、それでは私は、その間にちょっと××運動のアジ演説をやって来ようかな。あすこの市には、朝鮮人の人出が多いから、わりに効果があるんです。

クラシノフ　僕も弥次りに行こう。飯にならないんじゃあ、いま家にいたってしようがない。ははははは。

李剛　（ぼんやりと）そうだ。そうしてくれたまえ。

クラシノフ　救世軍の前でやろうじゃないか。やつらの楽隊を人寄せに利用するのだ。

鄭吉炳　しかし、咽喉が耐りませんよ。あの太鼓とタンバリンに勝とうとすると、いい加減声が潰れてしまう――おや！　卓さんは？　あの人を引っ張って行ってトいの夜店を出させると、うまく往きゃあ煙草銭ぐらいにはなるんだがな。

クラシノフ　名案だ。卓さんはどこにいる。

李春華　二階に寝ていますわ。

鄭吉炳　相変らず要領がいいな。

駈け上って行く。間もなく寝呆けている卓連俊を引き立てて降りて来る。

鄭吉炳　お爺さんしっかり頼むぜ。ワデルフスキイの縁日へ商売に行くんだ。眼をぱっちり開けなよ。

卓連俊　（よろよろしながら）トい者に自分の運命がわからねえように、あんたにゃあ民族の運命がわからねえ、皮肉だね。お互いに無駄なこった。

クラシノフ　はっはっは、洒落たことを吐かしたね。商売道具を持ってついて来たまえ。一緒にやろうじゃないか。

卓連俊は自分の寝床のそばへ売卜の道具のはいった小鞄を取りに行こうとして、上着の下から火酒の壜が転がり出る。

鄭吉炳　なんだ、臭いと思ったら、爺さん、早いとこ呑ってやあがら。さ、出かけよう。すこしパンフレットを持って行こう。

鄭吉炳とクラシノフは小冊子の束を抱えて出て行く。古ぼけた手鞄を提げて卓連俊が続く。李剛はパイプを吹かして、じっと洋燈の灯に見入っている。間。

李春華　（静かに李剛へ近づいて）あなた、みんな外へお出しになったのね。何かお考えがあるんでしょう？

李剛　（気がついたように）うむ。考えがあるのだ、君も、今のうちに柳さんを伴れて、いつものように洪沢信のところへ貰い湯に行って来たらどうだ。

李春華　そうね。そうしましょう——では、柳さん、このひまに一風呂浴びて来ましょうか。

柳麗玉　（物思いから呼び覚まされて快活を装い）え？　ええ。お供しますわ。

と李剛の様子に眼を配りながら、柳麗玉は李春華とともに入浴の道具をまとめて去る。

李剛はそそくさと起って、いま女たちが閉めて出た表のドアを開けて来る。そして、階段のほどよい段に洋燈を移し、第一段に腰かけて人待ち顔に洋燈の下でパイプの掃除にかかる。遠くで汽笛が転がる。朝鮮服の安重根がちょっと室内を覗いたのち、足早やにはいって来る。革紐で縛った古行李を引きずるように提げている。すぐ李剛と向い合って行李に腰かける。

安重根　（微笑して）しばらくでした。
　不安らしく階段の上に耳を澄ます。

李剛　（パイプの掃除に熱中を装い、無愛想に）大丈夫です。誰もいない。君の伝言（ことづけ）どおりにみんな出してやった。が、そこらでうちのやつに会わなかったですか。

安重根　すぐ前の往来で奥さんと柳に会いましたが、二人とも気がつかないようでしたから、黙って擦れ違って来ました。
　李剛は無言でうなずいて、起ってドアのほうへ歩き出しながら、そっとルバシカの下へ手を入れて財布に触ってみる。安重根も行李を抱えて続こうとする。

李剛　（戸口で振り返って）君、洋燈（ランプ）を――。
　消す手真似をして出て行く。安重根は引っ返して洋燈を吹き消し、急ぎ足に李剛のあとを追って出る。

5

港の見える丘。前の場のすぐ後。

砂に雑草が生えている。暗黒。崖縁の立樹を通して、はるか眼下に港が見える。碇泊船の灯。かすかに起重機の音。星明り。

安重根と李剛が話しながら出て来る。安重根は行李を抱え、李剛は跛足(びっこ)を引き、パイプをふかしている。

李剛　朝鮮の着物には個性がないからねえ、忍術には持ってこいだよ。

安重根　何と言いましたっけね、あの角の床屋、来ましたか。

李剛　張首明か。（港に向って草の上に腰を下ろす）歩くのは降参だ。うむ。来たよ。あの男の言葉から、僕は君の意思を察したつもりで、ああして皆を外出させて待っていたのだ。

安重根　（並んで坐る）今朝着いて、あの床屋の店で徳淳に会ったきり、どこへも顔出しせずに、午後いっぱい買物をしていました。ちょっと旅行に出るもんですから、着物や何か――。（行李を叩いて）今夜一晩、黄成鎬さんのところへ泊って、明日発(あした)ちます。

李剛　あした発(た)つ？　それはまた急だねえ。だが、日本の客は予定よりすこし早く着くことに

なった様子だから、なるほど。

安重根　（弁解的に）先生、私は家族を迎えにハルビンへ行くんです。

李剛　（笑う）それもいいだろう。

安重根　（懸命に）ほんとに家族を迎えに行くんです。

李剛　（いっそう哄笑って）まあ、いいですよ。解っている。あのスパイの張首明に、仲間であるようなことを言わせて、うちへ使いに寄こした君の心持ちもわかるような気がする。が、もう今ごろは、ウラジオ中の同志のあいだに、君が密偵臭いという評判が往き渡っていることだろう。

安重根　すると張首明は、頼んでとおりに、私と親しくしているような口振りだったんですね。

李剛　（心配そうに）朴鳳錫だの白基竜だの、言うなといっても言わずにはいられない人間だからねえ。

安重根　ははははは、そう思ってしたことです。朴君なり白君なりの口を出る時は、「あいつ臭いぞ。用心しろ」ぐらいのところでしょうが、それが、人から人と伝わっていくうちに、「安重根は日本に買われている」となり、「彼奴はその金でさかんに女房の名で故郷に土地を買っているそうだ」などと、まことしやかな話が出て来るに決まっています。ははははは、私も昨今運動に入ったのではありませんから、そういうゴシップの製造過程はまるで眼に見るようにわかります。

李剛　まさかそんなことも言うまいが、しかし、若い連中の失望と恐慌は、相当大きなものだろう。なにしろ、今度の計画が知れてからというものは、安重根という名は彼らのあいだに一つの神聖な偶像になっているからねえ。

安重根　（不愉快げに）そんなこと言わないで下さい。だからこそ今日、わざわざあの日向臭い床屋の店で、張首明とかいう人に調子を合わせて、小半日も油を売ったのですが、すると、それも、私の期待したとおりの結果を生みそうですね。（淋しく笑う）裏口から使いが走って、日本人のスパイを呼んで来ましたよ。

李剛　（皮肉に）君も偉くなったねえ――。（鋭く）安君！　君は、あとで、同志の人たちに迷惑を及ぼしたくないと考えて、そうやってわざとグルウプから除外されようとしているのだろうが、僕は、そのちっぽけな心遣いが気に食わないのだ。

安重根　（独り言のように）そう見えますかねえ。ふん、先生らしい考え方だ。私はただ、みんなに会いたくないんです。会いたくない――と言うより、会うのが恐しいのです。

李剛　なぜです。僕にはよくわかっている。いよいよ決行に近づいて、君は同志の信を裏切ったように見せかけて一人になろうとしている。なるほど、愚かな同志は、君の狙い通りに君を排斥するだろうさ。しかし、それはほんのしばらくの間だということは、誰よりも君自信が一番よく知っている。後になって君の挙を聞いて、一同はじめてその真意を覚る――。（苦笑）昔から君のすることは万事芝居がかりだった。

安重根　（苦しそうに）同志？　先生は、何かと言うと同志です。僕は、同志などというものから解放されて、自分の意思で行動することはできないのか――。

李剛　（冷淡に）それもいいさ。だが、自分の名を美化するためには、人の純情を翻弄してもかまわないものかね。

安重根　（淋しく）そんなことより、僕はいま、僕自身を持て余しているんです。（起ち上る）この気持が解ってもらえると思って来たんですが――僕は、ここへも来るのじゃあなかった。

李剛　君も知っているだろう。今日は煙秋（エンチュウ）から安重根が出て来るというので、ウラジオじゅうの同志が、まるで国民的英雄を迎えるように興奮して、泪ぐましいほど大騒ぎをしていた。

安重根　（憤然と）止して下さい！　馬鹿馬鹿しい。（歩き廻る）あなたは人が悪いですね。何もかも御承知のくせに、じつに人が悪い。

李剛　（笑い出して）それはどういう論理かね？

安重根　そうじゃありませんか。先生はさっきからしきりに同志同志と言いますが、僕はこのごろ、その同志というやつが重荷のように不愉快なんです。（突然、叫ぶように）いったい同志とは何です！　同志なんて決して、実現しない空想の下に、めいめい、その決して実現しないことを百も知り抜いていればこそ、すっかり安心しきって集っている卑怯者の一団に過ぎません！　お互いに感激を装って、しじゅう他人の費用で面白い眼にありつこうとしている――。

李剛　（微笑）まったくそのとおりだ――。（間）おお、君、飯はまだだろう？

安重根　この私の場合がそうです。なるほど私は、この計画を二、三のいわゆる同志に打ち明けて相談したことがあります。（李剛の傍に坐る）ええ、まだです。じつは、朝から何も食べずに、今まで考えながら歩いていたのです。

李剛　自宅へ行くと何かあるようだが――。（とルバシカの懐中から紙入れを引き出して、そっと紙幣を数えながら）しかし、それは君、君自身の心持ちに、外部から突っかえ棒を与えて、いっそう決行を期そうとしたのじゃないかな！

安重根　そういう気持ちも、あるにはありました。ところがです、それがいつの間にかこの辺一帯の同志のあいだに拡まってしまって、このごろでは、私が伊藤を殺すことは、まるで既定の事実か何ぞのように言われているのです。

李剛　（冷く）それほど期待されていれば、結構じゃないですか。僕個人としては、前にもたびたび言ったように、この計画には絶対に不賛成なのだが――。

安重根　先生、私も嫌になりました。上っ面な賞讃と激励で玩具にされているような気がして、同志という連中の無責任さに反撥を感じているんです。私はさっき、同志に会いたくない、会うのが恐しくて、今朝ウラジオへ出て来ても一日逃げ隠れていたと言いましたね。国士めかした、重要ぶったやつらの顔が癪なんです。それに、どういうものか私はあの連中に会うと、不思議な圧迫を感じて、是が非でも伊藤を殺さなければならない気持ちにさせられる。それが恐しいのです。（笑って）この私は、皆から、あの一人の人間を殺すためにだけ生れて来たもの

と頭から決められているんですからねえ。なかには、もう決行したかのように、私を、あなたの言葉でいえば「国民的英雄」扱いして喜んでいる者もあります。何と言っていいか、じつにやりきれない気持ちです。

李剛　（低声に）人気者は気骨が折れると諦めるさ。

安重根　先生は冷淡です。僕がこんなに苦しんでいるのに、すこしも同情を持とうとしない。誰も僕のことなんかこれっぽっちも考えてはいないんです。なんでもいいから、一日も早く僕が伊藤を殺しさえすれば、それでみんな満足するんでしょう。だから、やれ決死の士だの、やれ、韓国独立の犠牲だのと、さんざん空虚な美名で僕を祭り上げて、寄って集って僕を押し出して、この手で伊藤を殺させようとしているんです。（独語）誰がその手に乗るもんか。

李剛　（不思議そうに）君は何を苦しんでいるのかね。

安重根　（仰向けに寝転ぶ）人間なんて滑稽なもんですねえ。以前は私なんかに洟も引っかけなかった連中まで、一度今度の計画が知れると、まるで手の平を返すように、どこへ行っても別扱いです。みんな十年の知己のように馴々しく手を差し伸べて来るか、さもなければ、まるで仏像でも見るような眼をします。それが私には、死者に対する冷い尊敬と、一種の憐愍の情のようにしか打って来ないんです——たまりません！

李剛　（平静に）はっはっは、君の言うことを聞いていると、まるで他人の命令で、今度のことを思いついたように聞えるが、すくなくとも僕だけは、はじめから反対だったのだからねえ。

今だって反対です。一プリンス伊藤を斃したところで、日本のジンゴイズムはどうなるものでもない。韓国の独立という大目的のためにも、何ら貢献するところはないと思う。単なるデモとしたって、計画的に後が続かなくちゃあ、一つだけでは何の効果もないのだ。

安重根　（低く笑って）しかし先生、私はどういうものか、この計画は、何らかの形で最初あなたから暗示を受けたような気がしてならないんですがねえ。

李剛はぎょっとして起ち上る。安重根は草に寝たまま、感情を抑えた声で続けている。

安重根　解っていますよ。それは、言葉の表面では、先生は初めから反対でした。ははははは。

李剛　（狼狽を隠して）言葉の表面？　何のことです。僕は今も明白にその反対の理由を話したばかりだが——第一、そういう内面的な経過は、僕の知ったことではない。

安重根　（起き上る）先生ばかりじゃありません。同志と称する連中は、私が伊藤を殺すのを面白がって待っているんです。（ぼんやり草を　りながら）みんな何よりの、秘密な楽しみにしているんです。だからこのごろ、あの連中に会うと、「まだこいつは決行しないな。何をぐずぐずしているのだ。機会がないなんて、東京へ行って伊藤公の邸へ押しかけたらいいじゃないか」と、そんな顔をしています。まるで何か約束の履行を迫られているような気がします。（興奮して）しかし私は、誰とも、必ずあいつを殺すと約束した覚えはないんです。それでも私は、この、同志たちに課せられた不当な負債を生命（いのち）を的にして払わなければならないもので

しょうか。

李剛　（凝然と立っている）驚いた。君という人間は、実に女性的だねえ。負債？　何が負債です。君はどうかしている。何もそんな考え方をする必要はないのだ。（なかば独り言のように）やはり病気のせいかも知れない――このごろ、胸のほうはどうです。

安重根　（激昂して起ち上る）負債じゃあありませんか。僕は自由人を標榜（ひょうぼう）して伊藤公暗殺――。

李剛　安君！　君、そんなことを大きな声で言っていいのか。

安重根　（声を落して）自由人を標榜して伊藤公暗殺を計画したんです。ところが、滑稽なことには、その計画が知れると同時に、その瞬間から、僕は同志によって自由人でなくされてしまった。みんなの共有の奴隷になってしまったんです。（激して）嫌です！　断じて嫌です。こうなったら、同志を相手にあくまでも戦うだけです。戦って、この束縛から跳き出るんです。

李剛　（笑いながら）いったい君はどうしようというのだ。

安重根　同志が聞いて呆れる。あいつらはただ、私を追い詰めて騒いでいれば幸福なんです――。

李剛　君、飯はまだだと言ったね？　（手の紙幣（さつ）束を突き出して）これで何かそこらでやってくれたまえ。僕もつきあえるといいんだが、社にちょっと用があるから、失敬する。（歩きかける）

安重根　（機械的に受取って）御免です！　同志なんかというおめでたい集団力に動かされて——嫌なこってす。誰が他人のお先棒になるもんか！　僕はそんなお人好しじゃあないんだ。

と手の札束に気がついて愕く。

安重根　（追いかけて）先生、これ、どうしたんです。こんなにたくさん——。

李剛　飯を食って、余ったら旅費のたしにするさ。

安重根　（警戒的に）旅費——？

李剛　（声を潜めて）安君、金は充分か。

安重根　（ぎょっとして飛び退く）金？——何の金です。

李剛　（迫るように寄る）君はさっき、今夜一晩黄成鎬のところへ泊って、明日発つと言ったね。旅費さ。旅費だよ。（意味あり気に）旅に出ると、金が要るからねえ。

安重根　（熱心に）先生、ほんとに僕は途中ちょっとポグラニチナヤへ寄って、それから、家族を迎えに（ハルビンへ）行くんです。それだけなんです。

李剛　（強く）よろしい！　家族を迎えにハルビンへ行きたまえ。

二人は探るように顔を見合って立っている。長い間。

李剛　（低声で）今となっては同志が黙っていまいよ。こんなに知れていることだからねえ。

間。

安重根　今日一日それを考えたんです――仕方がありません。ハルビン行きは止めます。止めて、自首します。

李剛　（冷く）自首！　それもいいだろう。いまさかんに日本の御機嫌を取っているロシアのことだから、警察は大よろこびだ。

安重根　（間）こんなに苦しむより、いっそ自首して出たほうがどんなにましだかしれやしません。（泪ぐんで）自首します。自首すれば、とにかく問題は解決して、先生も安心でしょう。僕も安心です。謀殺未遂というやつですねえ。結構です。

安重根は革紐で行李を引きずり、俯向いて歩き出しながら、ゆっくり自分に言い続ける。

安重根　そうだ。自首してやれ。何でもいい。自首して、あいつらに鼻を明かしてやりさえすれば、それでいいのだ。自首だ。今まできいたふうな口を叩いていた見物人は驚くだろうなあ。今度は生やさしい間諜の噂ぐらいではないぞ。（決然と）腹の底から引っくり返るようにやつらに、背負い投げを食わしてやるのだ――。

と急ぎ去る。李剛は微笑を含んで見送っている。

6

その真夜中。博徒黄成鎬の家。

往来に面した部屋。正面いっぱいの横に長い硝子窓に、よごれた白木綿のカアテンがかかっている。中央に戸外に開くドアあり。左右にも扉があって閉まっている。左は台所、右は別室へ通ずるところ。真ん中に、火のはいっていないストウブを取り巻いて毀れかかった椅子数脚。あちこちに粗末な卓子、腰掛けなど数多ありて、集会所に当ててある。腰掛けの一つは逆さまに倒れ、紙屑、煙草の吸殻など散らばり、乱雑不潔なるさま。赤い紙片で包んだ電燈が低く垂れ下っている。

黄成鎬――博徒。独立党の同情者、五十前後。ほかに禹徳淳、朴鳳錫、白基竜、安重根、柳麗玉、第三場の同志一、二および青年独立党員四五十人。

朝鮮服、ルバシカ、破れたる背広等を著たる青年独立党員が、舞台を埋めて立ったり掛けたりしながら、安重根を待って、激越な調子で議論をし合っている。同志一、二の一団はストウブを取り巻き、黄成鎬は離れた卓子に腰かけて他の青年らと話し込んでいる。

青年らはテンポの速い会話で、がやがや言っているように聞こえる。

青年A　（一隅から）韓国を踏台にして満洲へ伸びようとする日本の野心は、誰に指摘されなくたってわかっているんだ。

青年B　（他の側から）おい、そう言えば、今度伊藤が来るのも、ハルビン寛城子間の東清鉄道を買収するためだと言うじゃないか。

青年C　（起ち上って）今でさえ日本は、満洲から露領へかけてのさばり返っている。そんなことになろうものなら、俺たちの運動はいったいどうなるというんだ。

黄成鎬　（前からのつづきで周囲の青年達へ）なるほど私は学問はない。が、こうして独立党の方々にお近づきを願って、八道義兵総指揮官金斗星先生にまで、黄さん黄さんと友達づきあいにされている身だし、お前さん方をはじめ党の若い人たちも、なあにウラジオへ行きゃあ黄成鎬のおやじがいるというんで、皆さんここで草鞋を脱いで下さるから、まあ、そんなこんなでこの数年、だいぶ独立党員の面倒を見て来たつもりだが、私はいつも言っていますよ。見てろ、あの安重根という人は今に何かでっかいことをやっつけるぞ――。

青年らはしきりに首肯く。

同志一　（ストウブの前から青年Aへ言っている）それは君、噂だけだよ。実際前にも一度そんな話があったけれど、条件が折合わないで廃棄されたんだ。

青年D　（他の隅から）が、今度蔵相のココフツォフは、全権として重大な使命を帯びて来るというから、伊藤と会えば、あるいはその問題が再燃するかもしれない。

青年C　（大声に）そんなことはどうでもいい。おれはたった一つのことだけ知っている！

青年E　（腰掛けに仰臥していたのがむっくり起き上って）そうだ！　ぐずぐずしていると、おれたちの運動は眼も当てられないことになるんだ――。

これに和して、激した声が騒然と起る時、遠くから「コレア・ウラア！　コレア・ウラア！」と二三人の叫び声が近づいて来る。一同は瞬間しんとして聞耳を立てる。

青年E　安重根だ！

とドアへ走る。青年四五人が「安重根だ。安重根が来た！」と叫びながら続いて、青年Fを先頭に戸外へ駈け出る。

声　コレア・ウラア！　コレア・ウラア！

家の前へ来かかる。室内でも皆足踏みに合わして、「コレア・ウラア」の合唱になる。

同志一、二をはじめ多勢窓へ駈け寄って硝子戸を開ける。

同志一　安君！　安重根君！
　いま出て行った青年Fらとともに禹徳淳と白基竜が下手の窓外を通り、すぐにドアからはいって来る。

同志二　（失望して）何だ、安重根じゃないのか。
禹徳淳　（昂然と）コレア・ウラア！　やあ、みんな揃ってるな。
　一同はがやがやはいって来て元の位置に戻る。白基竜は悄然と隅の腰掛けにつき、卓子に俯伏す。

同志一　（禹徳淳へ）いったい安重根さんはどうしたんです。どこにいるんです。
禹徳淳　（ストウブへ進んで）もうストウブが出ているのか。こりゃあ気がきいてる。まったく、夜そとを歩いていると、海から吹いて来る風で頬っぺたが切れそうだからなあ。（気がついて）だが、火のないストウブじゃあしようがない。
黄成鎬　徳淳さん、安さんはまだ見(め)つかりませんかね。皆さんこうしてお待ちかねだが――。
　上手、別室のドアがあいて、「ちょいと。」と黄成鎬を呼ぶ妻黄瑞露の声がする。

ドアの前の青年　（振り返って）おやじさんかい。（黄成鎬へ）おい、おかみさんが呼んでるぞ。

黄成鎬は起って別室へ入り、間もなく、何事か聞き取って承知したる顔で、そっと帰って来て、もとの卓子に腰かけている。

禹徳淳　（今の黄成鎬の問いを笑いに紛らして）ははははは、君たちはこの、火のないストウブを囲んでどうしようというんだ。

青年G　（壁にもたれて、懐疑的に）火のないストウブか。ほんとだ。火のないストウブに当って、いくらか煖かいつもりでいる。気力のない同胞を激励してどうにかなる気でいる。運動の将来も楽じゃないなあ。

同志一　（ストウブの覆をあけて黄成鎬へ）おやじ！　火を入れろ。

同志二　石炭はどこにある。

黄成鎬　（独語）火のねえストウブに当って煖けえ気でいる。（手真似で考える）こいつあうめえことを言った。大きにそんなものかも知れねえ。

同志二　（黄成鎬へ）何を感心しているんだ。夜が更けて来たら急に寒くなった。ストウブを焚くんだ。石炭奢れよ。

黄成鎬　火はありませんよ。石炭もありませんよ。火種もなし石炭もなしで火を燃やすのが、

あんた方の仕事だ。

青年H　はっはっは、あんなことを言う。

青年Eは倒れていた腰掛けを起して馬乗りになっている。

青年E　しかし、さっきの話ですがねえ、僕あ伊藤がハルビンへやって来る真の目的は、鉄道買収などとそんなちっぽけなことではあるまいと思うんだ――。

禹徳淳　何の話だ。例の一件かい。

同志一　（青年Eへ）無論さ。韓国の問題を解決するために、ロシアと清国の諒解を求める必要があるんだ。だから、ハルビンでココフツォフと会見した上で、場合によっては北京を訪問する意思らしいぞ。

青年I　（一隅から）おい、昨日のジャパン・タイムス見たか。社説に出てるぞ。日本とロシアが満洲を分割するんだそうだ。それで、満洲へ来ることが決ってから、伊藤は桂首相と頻繁（ひんぱん）に往来しているし、日本皇帝にもたびたび拝謁している。そして、連日長時間にわたる閣議が開かれているというんだ。

この以前より禹徳淳は、電燈を覆っている赤い紙片を　り取って、青年たちの騒然たる会話の中で、声高に読み上げている。

禹徳淳　何だ、こりゃあ――うむ、こないだ配った歌だな。おい、君らみんな知ってるだろう。よし、一緒にやろう。読むぞ。（慷慨の調にて大声に）

敵の汝に逢わんとて
水陸幾万里
千辛万苦を尽しつつ
輪船火車を乗り代えて
露清両地を過ぐるとき
行装のたびごとに
天道様に祈りをなし
イエス氏にも敬拝すらく
平常一度び逢うことの何ぞ遅きや
心し給え心し給え
東半島大韓帝国に心したまえ

一同はじっと聴き入っている。

7

時間的に遡って、この場の前半は前場と同時刻を繰り返す。

黄成鎬方台所。前の場の左側につづく部屋。舞台正面、下手寄りに廊下へ開くドア。右側に前場の集会所に通ずる扉あり。固く締まっている。反対側に裏口。窓はない。

片隅に土の竈。流し場、水桶ありて、鍋、釜、野菜の籠など土間に置いてある。壁にはフライ・パンなどかかり、棚に茶碗、皿小鉢類。他の隅に薪を積み、中央に低い粗雑な卓子と椅子二脚。暗い電燈。

黄瑞露――黄成鎬妻、五十歳ぐらい。ほかに安重根、柳麗玉、禹徳淳、朴鳳錫、白基竜、黄成鎬、同志一、二および前場の青年多勢と露国憲兵数名。近所の人々。

前場の初めと同じ時刻。壁を通して隣室の青年らの話し声が間断なく聞えている。李剛と別れたままの朝鮮服の安重根が、隣室を気にしながら神経質に、足早に歩き廻っている。テエブルの上に古行李が置いてある。安重根は細目に正面下手の扉をあけて廊下の様子を窺ったのち、卓子へ帰り、焦慮に駆られる態にて行李を開けようとし、逡巡する。椅子の一つに柳麗玉が腰かけて、尊敬と愛着の眼で見守っている。

長い間。隣室の話声が高まる。廊下の戸があいて、寝台代りの藁蒲団と毛布を担いだ黄瑞露が顔を出す。

黄瑞露　柳さん、ちょっと手を貸して下さいよ。これ――。

安重根は病的に愕く。

黄瑞露　（びっくりして）何ですよ。何をあわててるんです。

安重根　ああ、びっくりした。考えごとをしているところへ不意に開けるもんだから――ああ驚いた。何です。

黄瑞露　ははははは、お前さんどうかしているよ。こっちこそびっくりするじゃないか、ねえ柳さん。床をとって上げようと思って――。

柳麗玉　あら、もうお寝(やす)みになったんだろうと思っていましたわ。すみません。

と起って戸口(ドア)へ行き、黄瑞露に手伝って藁蒲団と毛布を室内に持ち込む。遠くから「コレア・ウラア！」の叫び声が近づいて来る。同時に隣室にもその合唱と足踏みがはじまる。黄瑞露と柳麗玉は一隅の薪の積んである前に寝床を設えている。

黄瑞露　（隣室の騒ぎに眉をひそめて）何でしょうねえ、夜中だというのに――。（柳麗玉へ）今夜は此室で我慢して下さいね。

柳麗玉　どこだって構いませんわ。

黄瑞露　（笑う）そんなどころじゃないんでしょう？　久しぶりですものね。

二人は床を敷き終る。安重根は疲れた態でぼんやり椅子に掛けている。

柳麗玉　（嬉し気に）嫌な小母さん！　ちょっとお話しにならない？

黄瑞露　もう晩いからね。（出ようとして安重根を見る）まあ、安さんの顔いろったらないよ。病気が悪いんじゃないだろうかねえ。

柳麗玉は心配そうに安重根を凝視める。「安重根ウラア！」の声が隣室に起る。

黄瑞露　（しんみりと）ねえ、柳さん。去年の春でしたかしら。一度安さんが煙秋から出て来たことがあったっけねえ。あの時分の安さんから見ると、このごろは相変りがしていますよ。さっきそこの裏口からはいって来た時、わたしゃ誰かと思った。（柳麗玉へ）どこで会ったの？

柳麗玉　（得意げに）先生の奥さまと一緒に、洪沢信さんの家へお湯へはいりに行って、あた

しだけ一足先に出て来ると、洪さんの横丁でばったり――。

黄瑞露　でも、よござんしたねえ。

柳麗玉　（たのもしそうに安重根を見ながら）ええ、疲れていて、皆さんが待っていて下さるのにすまないけれど、今夜は誰にも会いたくない。何ですか、静かに考えたいことがあるって言うんですの。あたしも、皆さんに悪いようにも思いましたけれど、でも、なにしろ、大事な身体でしょう？　それに、本人がそういって肯かないもんですから、ここなら、みんな集まっているだけに、かえって見つかりっこないと思って、ああして裏からそっとお伴れしましたのよ。

黄瑞露　ほんとに柳さんは気がつきますよ。今うちの人にだけこっそり耳打ちしておきましたからね。大丈夫心得ていますよ。知らん顔して、追っつけみんなを帰すでしょうから、安心してゆっくりおやすみなさいよ。

黄瑞露去る。長い間。

安重根　（苦笑）そいつああありがたい。そんなに人相が変ったんなら、誰に会ってもわかるまい。

隣室では禹徳淳の歌の音読がはじまっている。柳麗玉は忍び笑いする。

安重根　（歌声に聞き入って微笑）元気にやってるなあ。（柳麗玉の様子に気づいて）莫迦によろこんでいるねえ。君もおれにあいつを殺させたい一人なんだろう。みんなのように、ああしておれの志を壮として、行をさかんにしてくれるというわけか。

柳麗玉の笑いは涕泣（すすりな）きに変っている。

安重根　（憮然と）何だ、泣いているのか。

柳麗玉　（眼を拭いて）もうじき世界中に有名になる安さんと、こうしているなんて、あんまり嬉しいんで、つい——。同志の方があんなに大騒ぎしている安さんを、あたし、一人占めにしているんだわね。なんだかすまないような気がするわ。

安重根　（自嘲的に）ふん、おれは家族を迎えにハルビンへ行くんだ。

柳麗玉　（わざとらしく）ええ、そうよ。よく解ってますわ。そして、独立党煙秋支部長の安重根——特派活動隊参謀中将の安重根が、すぐ世界の安重根、歴史の安重根になるのね。（感激に耐えかねて）ああ、あたし——あたし、ほんとに幸福だわ。

安重根は聞いていないように、手早く卓上の行李をあけて、つぎつぎに古着類を取り出す。茶の背広服、同じ色のルバシカ、円い運動帽子など。その動作は急に別人のように活気づいている。

安重根　（陽気に独語）ハルビンは寒いからな。
最後に露人の羊皮外套（パルナウルカ）を取り出す。

安重根　これだ。
柳麗玉がいそいそと外套を着せる。引きずるように長い。運動帽子をかぶる。考え込んで室内を歩きはじめる。柳麗玉は信頼と誇りの面持ちで、うっとりと安重根を見上げている。

8

元の隣室、集会所。

第六場の終りのままで、禹徳淳が、電燈から取った赤い紙片を読みつづけている。

禹徳淳　（大声に）
かの奸悪なる老賊め

われわれ民族二千万人
滅種の後に三千里の錦綾江山を
無声の裡に奪わんと
　青年らは凝然と聞き入っている。

青年Ｊ　（突然叫ぶ）何でもいいや。やっつけりゃあいいんじゃねえか。（禹徳淳へ）なあ、小父さん！
黄成鎬　静かにしてもらいてえね。もう何時だと思う。
青年Ｋ　何時だってかまうもんか。安重根さんが来るまでは帰(けえ)らねえぞ。
青年Ｌ　そうだ、そうだ！　みんな安さんを待って夜明かしするんだ。なあ、おい。
青年Ｍ　誰が安さんのほかに、生命を投げ出して決行しようという者がある。（叫ぶ）コレア・ウラア！　安重根ウラア！
禹徳淳　（手の赤紙を読み続ける）
　究凶究悪惨たる手段
　十強国を欺きて
　内臓を皆抜き取りながら

青年Ｎ　それは誰の作だ。
同志一　知らないのか。安さんさ。安重根が作ったんだよ。
　これより先、黄成鎬は右側の別室へ行って、禹徳淳が手にせると同じ赤い紙片を数多持って来て同志一、二に渡す。同志一、二はそれを青年らの間に配っている。
同志二　（配り歩きながら）みんな持ってるだろうが――。
青年Ｏ　いつ出したんだ。おれはもらわなかったぞ。
青年Ｐ　一枚下さい。
青年Ｑ　長いんで、お終いのほう忘れちゃった。
禹徳淳　三節からだ。一緒に読もう。
黄成鎬　大きな声は困りますよ。ここいら露助の憲兵がちょいちょい廻って来て厳(やか)ましいんでね。
青年Ｒ　何でえ。びくびくするねえ、おやじ。
禹徳淳　（つづけて）
　十強国を欺きて
　内臓を皆抜き取りながら

合唱　（はじめは低く、おいおい高く、後半は各人憤激の大声で統一を欠く）
何を不足に我慾を満たさんとて
鼠の子のごとくにここかしこを駈け歩き
誰をまた欺き何れの地を奪わんとするや
されど至仁至愛のわが上主は
大韓民族二千万口を
ひとしく愛憐せられなば
かの老賊に逢わしめ給え
逢いたりな逢いたりな
ついに伊藤に逢いたりな
汝の手段の奸猾は
世界に有名なるものを
わが同胞五六の後は
われらの江山は奪われて
行楽ともになし得ざりしを
甲午年の独立と
乙巳年の新条約後

ようよう自得下行の時に
今日あるを知らざりしか
犯すものは罪せられ
徳を磨けば徳到る
汝かくなるものと思いしや
ああ我等の同胞よ
一心団結したる上
外仇を皆滅して
わが国権を恢復し
富国強民図りなば
世界のうちに誰ありて
われらの自由を圧迫し
下等の冷遇なすべきや
いでいざ早く合心し
彼らの輩も伊藤の如く
ただ速かに誅せんのみ
立て勇敢の力持て

左側の台所へ通ずる扉に青年Gが凭りかかって、先ほどからドアの向うへ注意を凝らしている。

青年G　（手を上げて一同を制する）しっ！　静かにしろ。話し声が聞える――。

ぴたりと音読が止む。

黄成鎬　（呆けながら不安げに）誰もいねえはずだが――。

青年G　（ドアの隙間に耳を当てて）安さんだ。たしかに安さんの声だ。（台所を指さして、一同へ）おい、安重根が来ているぞ！

青年J　なに？　安さんが来てる！　台所へか。こっそり裏からはいったんだろう。引っ張り出して演説させろ！

青年L　怪しからん。おれたちがこんなに待っているのに、裏から忍び込んで知らん顔しているなんて――。

青年M　馬鹿！　そこが安さんの好いところじゃないか。

禹徳淳　（冷然と読みつづけて）

国民たる義務を尽さずして

無為平安に坐せんには

青年たちは一斉に起ち上って「われらの安重根！　安重根ウラア！」と口ぐちに歓呼している。

黄成鎬　（知らぬふりで台所のドアへ歩き出す）安さんが裏から来た？　どれ見て来ましょう。

白基竜　（卓子から顔を上げて呼び停める）おやじ、待て！（禹徳淳へ）言ったほうがいい。ほんとのことを――安が迷っているということを言うべきだ。

しんとして一同禹徳淳を凝視める。

禹徳淳　（読み終る）国本確立は自ら成ることなかるべし。

（白基竜へ、悲痛に）僕にはその勇気がないんだ。今になって、この熱烈な同志たちに、安が――言えない。僕には言えない。（台所のドアに向って大声に繰り返す）

国民たる義務を尽さずして
無為平安に坐せんには
国本確立は自ら成ることなかるべし

一同呆然と、台所のドアと禹徳淳を交互に見守る時、硝子窓を荒々しく開けて朴鳳錫が顔を出す。

朴鳳錫　（大声に）スパイは来ていないか。（同志一、二ら多勢窓際に駈け寄る）
同志一　スパイ――？
朴鳳錫　安のやつだ。安重根はスパイなんだ。
　とドアから駈け込んで来る。一同は罵り噪いで取り巻く。

朴鳳錫　張首明と通じているんだ。あの床屋の張よ。先刻あいつがやって来て露れたんだが、おれは前から知っていた。安重根のやつ、伊藤公暗殺などと与太を放送しときゃがって、それを種に、おれたちの機密に食い込もうとしていたんだ。だから、いよいよというこの土壇場に、伊藤を殺っつける気なんかこれっぽっちもありゃあしない。（禹徳淳を見て）なあ徳淳、そうだろう？　おれは今まで、李先生の命令で張の店を見張っていたが、白基竜は――。（白基竜を認めて）お！　白！　野郎いたか、停車場に。
　白基竜は無言で閉めきった台所の扉を指さす。

朴鳳錫　台所にいるのか。何故みんな――畜生！
　一同激昂のうちに朴鳳錫はドアへ突進する。禹徳淳が抱き停める。

禹徳淳　こら、早まったことをするな。安君の真意を突き留めてから――おい、朴を抑えろ！

制しようとする者と、朴鳳錫とともに台所へ侵入しようとする者とで舞台一面に争う。禹徳淳、白基竜、黄成鎬ら台所のドアを守る。ついにドアが開かれて、電燈の暗い台所、ドアのすぐ向側に、安重根を庇って柳麗玉が立っているのがちらと見える。朴鳳錫を先頭に同志一、二、青年C、E、J、K、L等一団に雪崩れ込んで行く。

9

もとの台所。

第七場の続き。安重根は外套を着て歩き廻り、柳麗玉は尊敬を罩めて見惚れている。多勢の合唱が隣室から聞えている。

安重根　（快活に）ルバシカの上から背広を着て、おまけにこのロシア人の大きな外套――とくると、考えものだぞ。日本人には見られないかもしれない。

柳麗玉　（一緒に考えて）今日お買いになったのね。この洋服や何か――でも、変装のことなんか、李剛先生は何ておっしゃって？

「国民たる義務を尽さずして、無為平安に坐せんには――。」禹徳淳の繰返しがはっきり聞えてくる。

安重根　（それを耳に傾けながら）日本人に見られないとすると、時節柄、怪しまれるにきまっている――。李剛先生？（苦笑）先生か。先生は、無論、暗殺そのものに反対さ。

　　跫音人声など突如隣室の騒ぎが激しくなり、境の扉へぶつかる音がする。

柳麗玉　（隣室に注意して不安げに起つ）安さん！　何でしょう――。

安重根　（熱して）正直のところ、僕は李剛さんを恨んでいる！　憎んでいる！　いつだって、ああやって冷静に構えて反対しながら、その反対することによって僕を煽って、僕を使ってあいつを殺させようとしているんだ。解っている。ははは、わかっているよ。

　　隣室の騒擾が高まって、ドアが開かれそうになる。柳麗玉はドアへ走って背中で押し止めようとする。

柳麗玉　安さん！

安重根　（無関心に）あの人にとって、僕という存在は一個の暗殺用凶器にすぎない。僕にはそれがよくわかる。（力なく）わかっていてどうすることもできないのが、僕は、この自分が、自分であって自分でないような――。（狂的に叫ぶ）あの人に会うと、いつもそうだ。口では極力止めながら、眼では、伊藤を殺せ！　伊藤を殺せ！　と僕を――（爆笑）はっはっはっは、

なるようになるさ。

柳麗玉　（必死にドアを押えながら）早く外套を脱いで、行李を――。

安重根が気がついて帽子と外套をとり、卓上の衣類を行李に入れ終った時、ドアがあく。柳麗玉は安重根をかばって立つ。朴鳳錫を先頭に同志一、二、青年ら一団になだれ込んでくる。正面の廊下から黄瑞露がはいって来ておろおろしている。

朴鳳錫　（柳麗玉を押し退けて）安重根！　貴様は――。

腕を振り上げて迫る。「燈を消せ！」と誰かが叫んで素早く電燈を消す。隣室から、開け放したドアの幅に光線が流れ込んでいるきり、舞台は暗黒。一同「スパイの畜生！」、「弁解を聞く必要はないっ！」、「今日の行動で明かだ。」、「さんざん俺たちを翻弄したな。」、「やっつけちまえ！」喚声を上げて包囲し、揉み合う。青年らは続々隣室から走り込んで来る。禹徳淳、白基竜、黄成鎬は渦中に割りこんで大声に怒鳴り、手を振り、鎮撫しようと努める。

柳麗玉　（朴鳳錫を止めて）何をするの？　静かに話してわからないことなの？

背年C　その女も食わせ物だぞ。一緒に殴(や)っちまえ。

口ぐちに呼ぶ。すべてが瞬間だ――。混雑のうちに朴鳳錫が安重根を殴る。続いて多勢

で罵りながら、床に倒れた安重根を袋叩きにする。柳麗玉は下手の裏口を開けて戸外へ駈け出る。禹徳淳、白基竜、黄成鎬、黄瑞露らは安重根を助けようとして八方停める、押し合う。椅子卓子が倒れ、皿小鉢は落ち、舞台一面に乱闘の観を呈する。

柳麗玉　（出て行って間もなく裏口から慌しく駈け込んでくる）憲兵ですよ！　憲兵ですよ！　露国憲兵五六人、佩剣を鳴らして裏口から走りこんでくる。

憲兵一　（大喝）何かあ、夜中に。

憲兵二　静かにしろっ！　騒ぐとぶっ放すぞ！

天井へ向けて二三発拳銃の空砲を放つ。一同は安重根、禹徳淳、白基竜、黄成鎬夫妻、柳麗玉を残し先を争って戸外へ逃げ去る。憲兵出現と同時に、黄成鎬は逸早く懐中からトランプを取り出して床に撒き散らしている。

憲兵二　空砲だ。空砲だ。あわてるな。

憲兵三　燈を点けろ、燈を！

点燈。青年らすべて退散したる明るい舞台に、家具食器など散乱し、格闘の跡。中央に安重根が俯臥して、柳麗玉はひざまずいて労わり、他はあるいは安重根の傍に、あるい

は壁ぎわに狼狽して立っている。床一面にトランプが散らばり、裏口に寝巻姿の近所の男女数名が驚いた顔を覗かせている。

憲兵上官　（黄成鎬へ進んで）貴様か、ここの主人は。何だこの騒ぎは。どうしたんだ。

黄成鎬　はい。まことにどうも申訳ございません。いんちき札を使ったとか使わねえとか、下らねえことから、何分その、気の早え野郎が揃っておりますんで、へえ。

上官　何？　博奕の喧嘩か。

黄成鎬　へへへへ、なに、ちょいと悪戯をしておりましたんで。お手数をかけまして、なんとも早や――。

憲兵四　（上官へ）自分は知っておるであります。ここは有名な朝鮮人の博奕宿であります。

上官　ほほう、君もちょいちょい来ると見えるね。

憲兵四　違うであります。自分は――。

上官　黙っておれ！　（倒れている安重根を軽く蹴りながら）こいつは死んでいるのか。

と黄成鎬を見て、ひそかに右手の拇指と人指指を擦り合わせて示す。眼こぼし料を要求する意。黄成鎬は手早く紙幣を取り出して、近づく。

黄成鎬　（安重根を覗いて）へへへへへ、なに、ちょいと眠ってるだけでございますよ、眠っ

てるだけで。

自然らしく上官の傍を通る拍子に、そっとそのポケットへ紙幣を押し込む、憲兵ら一斉に咳払いをする。

憲兵上官　うう、そうか。眠っているのか。眼が覚めたら介抱してやれ。（部下へ）引上げだ。

禹徳淳、白基竜ら一同博徒らしく装い小腰を屈めるなかを、憲兵裏口より退場。近所の人々は逃げて道を開き、すぐまた覗きに集まる。柳麗玉は安重根を抱き起している。

安重根　（泪に濡れた笑顔）ははははは、大丈夫、起てるよ。（禹徳淳を認めて）おう！　徳淳――！

よろめいて禹徳淳の手を握る。一同呆然と見守っている。

安重根　（力強く）夜が明けたな。（裏口のそとに空が白んで、暁の色が流れ込んでいる）汽車の時間は、調べてあるのか。

禹徳淳　（手を握り返して急き込む）行ってくれるか。ハルビンへ行ってくれるか。

安重根　（哄笑）はっはっは、心配するな。（柳麗玉に支えられながら）旅費はあるぞ旅費は。はっはっは、たんまりあるぞ。

黄瑞露は裏口の人を追って戸を閉めている。

10

ポグラニチナヤの裏町、不潔な洋風街路、劉任瞻韓薬房前。

十月十九日、夕ぐれ。

「韓国調剤学士劉任瞻薬房」と看板を掲げた、古びた間口の狭い店。草根木皮の類が軒下に下がって、硝子壜にはいった木の実、蛇の酒精漬けなど店頭(みせ)の戸外(そと)に並んでいる。左右は古着屋、乾物商などすべて朝鮮人相手の小商店。荷車、自転車など置いてあって雑然としている。低い家並みの向うは連山と、市街の屋根の重なる上に白い夕月。教会の尖塔がくっきり見えて、凹凸の石畳の下手に電柱が一本よろけている。

劉任瞻――医師兼薬剤師。老人、ロシアの農民風の服装。

劉東夏――その息子。十八歳。ルバシカに露兵の軍帽をかぶっている。

安重根、禹徳淳、柳麗玉、隣家の古着屋の老婆、ロシア人、支那人、朝鮮人等の男女の

通行人。

夕闇の迫る騒がしい往来。店の前の椅子に劉任瞻が腰かけて、小笊《こざる》に盛った穀物を両手に揉んでは、笊を揺すって籾殻を吹いている。ロシア人の裸足の子供の一隊、市場へ買出しに行った朝鮮人の女房二三、工場帰りの支那人職工の群などあわただしく通る。劉任瞻に挨拶して行く者もある。ロシア人の巡邏が長剣を鳴らして通り過ぎる。手風琴に合わして朝鮮唄の哀調が漂って来る。隣家の古着屋の老婆が、洋燈のほやを掃除しながら、店先いっぱいに古着の下がった間から顔を出す。

老婆　劉さんかね。もうランプを点けなさいよ。東夏さんはいないのかえ。

劉任瞻　馬鹿な野郎だ。先刻まだ早いうちに、また独立党の会があるとか言ってな、出かけて行ったきり帰らないのだ。帰って来たらどなりつけてやろうと思って、ここに出張って待っているのさ。

老婆　おや、それじゃあきっと自家の若い人たちと一緒ですよ。安重根とかいう人が来たと言って、商売をおっぽり出して駈け出して行きましたから。

劉任瞻　困ったものだ。わしはいつも東夏に言って聞かせているのだが、職業や勉強を蔑にし

て何が国家だ。何が社会だ。独立が聞いて呆れる。ちっとやそっとの人間が騒いだところで、世の中はどう変るものでもないのだよ。長い間生きて来て、わしや古着屋のお婆さんが一番よく知っているはずだ。なあ、お婆さん。

老婆　そうですともさ。

劉任瞻　世の中は理窟ではない。いや、たった一つ理窟があるとすれば、それは、強い者が勝ち、弱いものが負けるという理窟だけだ。強い者は勝って得をし、弱いやつは負けて損をする。しかし、その強い者もいつまでも強いというわけではなし、弱いものもやがては強くなる時があろう。上が下になり、下が上になるのだ。こうして世の中は、大きく浪を打って進んで行くので、百万陀羅議論を唱えても、どうなるというものではない。待つのだ。強い者が弱くなり、弱い者が強くなる時を待つのだ。ははははは、じっと待つのだよ。待ちさえすれば、その時機は必ず来る——。

反対隣りの乾物屋に灯が点く。手風琴と唄声は消えようとして続いている。間。

老婆　そんなものでしょうねえ、ほんとに。（下手を見て）おや、誰か来ましたよ。うちの人たちかもしれない。どれ、ランプに灯を入れておこう。

と古着屋に入る。

劉任瞻　東は東、西は西。若い者は若い者、年寄りは年寄りだ。

劉任瞻は穀物の笊を片附け、椅子を引きずって家へはいる。すぐその店と古着屋から灯りがさす。街路に光りが倒れて、もうすっかり夜の景色。下手から話し声がして、劉東夏を仲に安重根と禹徳淳が出て来る。

劉東夏　（自宅を指して）ここです。ちょっと待っていて下さい。家へはいろうとする。

禹徳淳　（追い止めて）君、大丈夫か。一人でお父さんをうんと言わせられる自信があるのか。

安重根　独立党の仕事で、僕らと一緒に行くなどと言ってはいけないぜ。

劉東夏　（英雄に対するごとく、安重根へ）そんなこと言やしません。私はしじゅう父の命令でハルビンへ薬を買いに行くんです。今度もその用で、二三日中に行くことになっているんですから、急に思い立って今夜これから発つと言っても、父は何とも言いはしません。

禹徳淳　（安重根へ）だが、今日この劉東夏君に会ってよかったな。僕も君も、露語と来るとまるきり駄目だからなあ。そこへ、ロシア人よりも露語の達者な劉君が一緒に行ってくれると言うんだから、まったく心強いよ。

安重根　いや、おれは劉君のことは以前から聞いていた。いつかウラジオの李剛先生が雑談的

に話したことがある。ポグラニチナヤに劉東夏という、若いがロシア語の上手な人がいる。露領の奥へ出かけるようなことがあったら、その人を通訳に頼みたまえ——僕はそれを思い出して、ぜひ劉君に会って頼むつもりでいたんだ。このポグラニチナヤに途中下車したのも、劉君に同行してもらうためだったのさ。

禹徳淳　（劉東夏へ）ハルビンの用は大したことじゃあないんだ。では、これからすぐ薬を買いにハルビンへ行くと言って、ぜひお父さんの許可を得るんだな。僕と安君は一足先に停車場へ行って待っている。

劉東夏は家に入る。

安重根と禹徳淳は急ぎ下手へ歩き出す。

禹徳淳　あいつのロシア語は手に入ったものだ。それにかなり党の仕事にも熱心だし、情報を集めたりなんか、連絡係りには持って来いだが、君はどの程度まで打ち明けるつもりでいるんだい。

安重根　何と言ってもまだ少年（こども）だからねえ。そのうちにうすうす感づくのは仕方がないが、何も知らせないほうがいいだろう。汽車の切符を買ったり、道を訊いたりするのに使うんだね。

禹徳淳　（突然立ち停まって安重根の腕を握り、下手を覗く）君！　柳さんじゃないか。そうだ。柳麗玉さんだ。

二人が下手に眼を凝らしつつ古着屋の前の電柱の陰へ隠れる時、柳麗玉が現れる。ウラジオから今着いたところで旅に疲れた様子。一尺四方程の箱包を糸で縛って抱えて、家を探す態で軒並みに見上げながら、不安げに歩いて来る。

安重根　（やり過しておいて）柳さん！――　やっぱり君だったか。

柳麗玉　あら！　安さん。よかったわ。まあ、徳淳さんも――。

安重根　（嬉しそうに柳麗玉の肩へ手を置こうとし、自制して後退りする）何しに来たんだ。何しに君はこんなところへ来たんです。（不機嫌に）僕らの今度の目的は、君も知っているはずだ。

柳麗玉　（いそいそと）ああよかった。後を追っかけて来たんですわ。夢中でしたわ。でも、ここでお眼にかかれて、ほんとに――。

禹徳淳　（苦々し気に）とうしたんです。柳さんはよく理解して、あの朝、ウラジオの停車場で気持ちよく見送ってくれたじゃないですか。

柳麗玉　（安重根へ）すぐつぎの汽車でウラジオを発って、今着いたところですの。李剛先生が、きっとこのポグラニチナヤの劉任瞻というお薬屋に寄っているだろうとおっしゃって――。

安重根と禹徳淳は顔を見合わせる。

柳麗玉　（にこにこして）忘れ物をなすったんですってね。あたし李剛先生に頼まれて、その忘れものを届けにまいりましたのよ。

禹徳淳　忘れ物――って何だろう。

柳麗玉　（紙包みを出して）何ですかあたしも知らないんですけれど――あなが方がお発ちになったすぐ後、李剛先生があたしを呼んで、二人が大変な忘れ物をして行った。非常に大切な物だ。ないと困る品だ。安さんは必ずポグラニチナヤに途中下車して、まだそこの劉任瞻という薬屋にいるだろうから、あたしに後を追って渡すようにと言うんでしょう。大あわてにあわててつぎの汽車に乗ったんですの。

禹徳淳　どうして先生は、おれたちがここへ寄ったことを知ってるんだろう。

安重根　（笑って）そら、さっき話したじゃないか。いつか李剛さんが何気なく、ここの劉東夏の噂をしたことがあるって。あの人の言動は、その時は無意味に響いても、後から考えるといちいち糸を引いているんだ。わかってるじゃないか。その時分から僕に東夏を使わせる計画だったんだよ。（柳麗玉へ）いや、ありがとう。御苦労。開けてみよう。

包みを受け取って地面にしゃがみ、ひらく。紙箱が出る。

禹徳淳　（覗き込んで）何だい、ばかに厳重に包んであるじゃないか。

安重根は無言で箱の覆を取る。拳銃が二個はいっている。

安重根　（ぎょっとして覆をする。静かに柳麗玉を見上げる）李剛さんが、僕らがこれを忘れて行ったと言ったって？

柳麗玉　あら！　（素早く箱の中を見て）ええ。ですけれど、あたし、そんな物がはいっているとは知らずに――。

安重根　そして李先生は、これを僕らに届けるために君を走らせた――。

と再び箱を開けて、禹徳淳に示す。二人は黙って顔を見合う。間。

安重根　（苦笑）二挺ある。何方でも採りたまえ。

禹徳淳　ははははは、まるで決闘だな。しかし、李剛主筆の深謀遠慮には、いつものことながら降参するよ。

安重根　（拳銃の一つを取り上げて灯にすかして見ながら）スミット・ウェトソン式だ。十字架が彫ってある。六連発だな。この銃身のところに何か書いてあるぞ。（横にして読む）――コレアン・トマス。

禹徳淳　朝鮮人（コレアン）トマス？　面白い。それを君の名前にするか。

二人はじっとめいめいの拳銃に見入っている。手風琴と唄声が聞こえて来る。

柳麗玉　（決然と）面白くなって来たわね。あたしだって働けるわ。ね、安さん、いっしょにハルビンに行くわ。

安重根は二挺の拳銃を箱に納めて、手早く元通りに包んでいる。

禹徳淳　そうだ。女づれだと、かえって警戒線を突破するのに便利かもしれないな。

夕刊売りの少年が上手から駈けて来る。

夕刊売り　夕刊！　夕刊！　ハルビンウェストニック夕刊！

三人の様子に好奇気（ものずきげ）に立ち停まる。禹徳淳が夕刊を買って下手へ追いやる。

禹徳淳　（新聞を拡げて、大声に）おい、出てるぞ。（紙面の一個所を叩いて安重根に示す）何だ？――「東清鉄道の事業拡張に関する自家の意見を確定するため極東巡視の途に上りたるココフツォフ蔵相は、二十一日ハルビン到着の予定。なお北京駐在露国公使コロストウェツの特に任地より来あわせる等の事実より推測すれば、時を同じゅうして来遊の噂ある伊藤公爵とわが蔵相との会見は、なんらか他に重大なる使命を秘するもののごとく想像に難からずと、某消息通は語れり。」――まだある。この後が大変なんだ。（活気づいて高声に読み続ける）「因に東清鉄道会社は、翌二十二日のため長春ハルビン間に特別列車を用意したり。」どうだ

い、こいつあ愉快なニュースだ。いよいよこうしちゃあいられない――。

柳麗玉　（勢い込んで、安重根へ）あたし其包持ってくわ。

安重根　いや、いかん。君はウラジオへ帰れ。帰って、李剛先生に礼を言ってくれ。忘れ物を届けてやったら、安重根は大喜びだったと。（禹徳淳へ）事務的に、ココフツォフの動きにさえ注意していたら、間違いなく、伊藤は向うからわれわれのふところへ飛び込んで来るよ。長春からハルビンまでの特別列車？　二十二日だって？

禹徳淳　（紙面を白眼んで）うむ。逢いたりな逢いたりな、ついに伊藤に逢いたりな――。

安重根　二日早くなったな。曹道先は知ってるんだろうな。

禹徳淳　無論すっかり手配して待ってるとも。おい、もう劉東夏が出て来るころだ。停車場へ行っていよう。

安重根は拳銃の包みを抱えて、禹徳淳とともに急ぎ下手へ入る。柳麗玉は勇ましげに見送ったのち、気がついて後を追う。薬屋の店から劉父子が出て来る。劉東夏は旅行の仕度をしている。

劉任瞻　（戸口に立ち停まって）用が済んだらすぐ帰るんだぞ。ハルビンは若い者の長くおるところじゃない。

劉東夏　（気が急いて）え。すぐ帰ります。じゃ、行ってまいります。

走り去る。

11

十月二十三日、夜中。ハルビン埠頭区レスナヤ街、曹道先洗濯店。

屋上の物乾し台。屋根の上に木を渡して設えたる相当広き物乾し。丸太、竹の類を架けて、取り込み残した洗濯物が二三、夜露に湿って下っている。下は、いっぱいに近隣の屋根。物乾し場の下手向う隅に昇降口、屋根を伝わって梯子あり。遠く近く家々の窓の灯が消えて往く。一面の星空、半闇。

曹道先――洗濯屋の主人。情を知って安重根のために働いている。四十歳前後。カラーなしで古い背広服を着ている。

ニイナ・ラファロヴナ――曹道先妻、若きロシア婦人。

金成白――近所の朝鮮雑貨商。安重根の個人的知人。朝鮮服。三十歳ぐらい。

他に安重根、禹徳淳、柳麗玉、劉東夏。

物乾し台の一隅に安重根と柳麗玉がめいめい毛布をかぶって、肩を押し合ってしゃがんでいる。長いことそうして話しこんでいる様子。足許にカンテラを一つ置き、一条の光りが横に長く倒れている。

安重根　（露地や往来が気になるごとく、凭りかかっている手摺りからしきりに下を覗きながら）だからさ、僕が伊藤を殺っつける――とすると、それはあくまで僕自身の選択でやるんだ。同志などという弥次馬連中に唆かされたんでもなければ、それかと言って、禹徳淳のように、例えば今日伊藤を殺しさえすれば、同時にすべての屈辱が雪がれて、明日にも韓国が独立して、皆の生活がよくなり、自分の煙草の行商もおおいに売行きが増すだろうなどと――（笑う）実際徳淳は、心からそう信じきっているんだからねえ。だが、僕は、不幸にも、あの男ほど単純ではないんだ。

柳麗玉　（寄り添って）そりゃそうだわ。徳淳さんなんかと、較べものにならないわ。

安重根　（独語）ほんとうに心の底を叩いてみると、おれはなぜ伊藤を殺そうとしているのかわからなくなったよ。

柳麗玉　（びっくりして離れる）まあ、安さん！　あなた何をおっしゃるの――？

安重根　ここまで来て、伊藤を殺さなければならない理由が解らなくなってしまった――。

（自嘲的に）祖国の恨みを霽らして独立を計るため――ふふん、第一、国家より先に、まずこの安重根という存在を考えてみる。（ゆっくりと）ところで、おれ個人として、伊藤を殺して何の得るところがあるんだ。

柳麗玉　（熱心に縋りついて）どうしたのよ、安さん！　今になってそんな――あたしそんな安さんじゃないと思って――。

安重根　（思いついたように）おい、こっそりどこかへ逃げよう。そっして二人で暮らそう！

柳麗玉　（強く）嫌です！　こんな意気地のない人とは知らなかったわ。なんなの、伊藤ひとり殺っつけるぐらい――。

安重根　（急き込む）ポグラニチナヤへ引っ返すか、さもなければチタあたりの、朝鮮人の多いところへ紛れ込むんだ。学校にでも勤めて、君一人ぐらい楽に食べさせていけるよ。僕あこれでも小学教員の免状があるんだからな。（懸命に）おい、そうしよう。天下だとか国家だとか、そんなことは人に任せておけばいいじゃないか。おれたちは俺たちきりで、小さく楽しく生活するんだ。自分のことばかり考えて、周囲に自分だけの城を築いて暢気に世の中を送るやつが――思いきってそういうことのできるやつが、結局一番利口なんじゃないかな。

柳麗玉　（起ち上る）ははははは、馬鹿を見たような気がするわ。今に人をあっと言わせる安さんだと思ったから、あたし、こんなことになったんだわ。

安重根　（笑って）冗談だよ。今のは冗談だよ。そんなことほんとにするやつがあるかい。

沈思する。間。

安重根　（苦しそうに）しかし、おれは今まで、一心に伊藤を恨み、伊藤を憎んで生きて来た。伊藤に対する憎悪と怨恨にのみ、おれはおれの生き甲斐を感じていたんだ。が、考えてみると、それも伊藤が生きていればこそだ。ははははは、ねえ、柳さん、君は伊藤という人間を見たことがあるか。

柳麗玉　いいえ。写真でなら何度も見たわ。

安重根　（急に少年のように快活に）ちょっと下品なところもあるけれど、こう髯を生やして、立派な老人だろう？

柳麗玉　（微笑）ええ、まあそうね。偉そうな人だわ。でも、あたしあんな顔大嫌い。

安重根　僕は三年間、あの顔をしっかり心に持っているうちに——さあ、何と言ったらいいか、個人的に親しみを感じ出したんだ。

柳麗玉　（かすかに口を動かして）まあ！

安重根　ははははは、やり方は憎らしいが、人間的に面白いところもあるよ。決して好きな性格じゃないが——。

柳麗玉は無言を続けている。

安重根　（下の道路に注意を払いつつ）僕が伊藤を憎むのも、つまりあいつに惹かれている証拠じゃないかと思う（間、しんみりと）なにしろこの三年間というもの、伊藤は僕の心を独占して、僕はあいつの映像を凝視め続けてきたんだからなあ。三年のあいだ、あの一個の人間を研究し、観察し、あらゆる角度から眺めて、その人物と生活を、僕は全的に知り抜いているような気がする。まるで一緒に暮らしてきたようなものさ。他人とは思えないよ。（弱々しく笑う）このごろでは、僕が伊藤なんだか、伊藤が僕なんだか――。

柳麗玉　解るわ、その気持ち。

安重根　白状する。僕は伊藤というおやじが嫌いじゃないらしいんだ。きっとあいつのいいところも悪いところも、多少僕に移っているに相違ない。顔まで似て来たんじゃないかという気がする。

柳麗玉　（気を引き立てるように噴飯す）ぷっ、嫌よ、あんなやつに似ちゃあ――。で、どうしようっていうの？

安重根　（間、独語的にゆっくりと）伊藤は現実に僕の頭の中に住んでいる。こうしていても僕は、伊藤のにおいを嗅ぎ、伊藤の声を聞くことができるんだ。いや、おれには伊藤が見える。はっきり伊藤が感じられる！

柳麗玉　（気味悪そうに）安さん！　あたし情けなくなるわ。

安重根　（虚ろに）伊藤がおれを占領するか、おれが伊藤を抹殺するか――自衛だ！　自衛手段だ！　が、右の半身が左の半身を殺すんだからなあ、こりゃあどのみち自殺行為だよ。

柳麗玉　（うっとりと顔を見上げて）そうやって一生懸命に何か言っている時、安さんは一番綺麗に見えるわね。

安重根　もう駄目だ。ハルビンへ来て四日、日本とロシアのスパイが間断なく尾けている。（ぎょっとして起ち上る）今この家の周りだって、すっかりスパイで固まってるじゃないか。

柳麗玉　（びっくり取り縋って）そんなことないわ。そんなことあるもんですか。みんな安さんの錯覚よ。強迫観念よ。ほら、（手摺りから下の露路を覗いて）ね、誰もいないじゃないの。

ニイナ・ラファロヴナが物乾しの台の上り口に現れる。

ニイナ　まあ、お二人ともこんなところで何をしているの？　寒かないこと？

柳麗玉　（安重根から離れて）あら、うっかり話しこんでいましたのよ。

安重根　何か用ですか。曹君はどうしました。

ニイナ　いいえね、今夜でなくてもいいんでしょうと思いましたけれど、これを持って来ましたの。

手に持っている鏡を差し出す。

安重根　あ、鏡ですね。
ニイナ　鏡ですねは心細いわ。さっきあなたが鏡がほしいようなことを言ってらしったから、これでも、家じゅう探して見つけて来たんですの。でも、こんな暗いところへ鏡を持って来てもしようがありませんわね。
安重根　いいんです。ここでいいんです。
　と鏡を受け取ろうとする。

ニイナ　（驚いて）まあ、安さん、その手はどうしたんですの。
安重根　手？　僕の手がどうかしていますか。
ニイナ　どうかしていますかって、顫えてるじゃないの、そんなに。
　安重根はニイナへ背中を向けて、自分の手を凝視める。自嘲的に爆笑する。

安重根　（手を見ながら）そうですかねえ。そんなに、そんなに顫えていますかねえ。はっはっは、こいつあお笑い草だ。
ニイナ　笑いごっちゃありませんわ。まるで中気病みですわ。水の容物（いれもの）を持たしたら、すっかりこぼしてしまいますわ。
　安重根はふっと沈思する。

ニイナ　（何事も知らぬ気に）あたしなんかにはいっこう解りませんけれど、それでも、いま安さんが立役者だということは、女の感というもので知れますわ。うちの曹道先なども、この間じゅうから、今日か明日かと安重根さんの来るのを待ったことと言ったら、そりゃあおかしいようでしたわ。

安重根は手摺りに倚って空を仰いでいる。

ニイナ　そんなに持てている安さんじゃあないの。何をくよくよしているんでしょう。ねえ、安さん、そんなことでは――。

安重根　（どきりとして顔を上げて、鋭く）何です。

ニイナ　まあ、なんて怖(こわ)い顔！　そんなことでは柳さんに逃げられてしまうって言うのよ。ねえ、柳さん。

安重根　（ほっとして）あ、柳ですか。柳に逃げられますか。そうですねえ。

ニイナ　何を言ってるのよ。妙にぼうっとしているわね。冗談一つ言えやしない。

ニイナは降りて行く。安重根は片手に鏡、片手にカンテラを取り上げて黙って顔を映して見る。長い間。

柳麗玉　その鏡どうなさるの？

安重根　屋下へ降りて、もう一度最後にあの変装をして鏡に映してみようと思って――。

　あわただしい跫音とともに昂奮した禹徳淳が物乾し台へ駈け上って来る。

禹徳淳　（安重根の腕を取る）おい！　いま東夏のやつが調べて来た。とうとう決まったぞ。明日の晩か明後日の朝、出迎えの特別列車がハルビンから長春へ向って出発する。

安重根　（禹徳淳の手を振り放して、ぼんやりと）そうか――。

禹徳淳　（いらいらして）どうしたんだ君あ！　（どなる）こんな素晴しいレポがはいったのに何をぽかんとしている。

安重根　（間。禹徳淳と白眼み合って立つ。急に眼が覚めたように）徳淳！　それはたしかか。すると、その汽車で来るんだな。（考えて）途中でやろうか。

禹徳淳　（勢い込んで）これからすぐ南へ発って――。

安重根　（別人のように活気を呈している）そうだ！　三爽河まで行こう！　ハルビンで決行する方が都合がいいか、他の停車場へ行ってやるのがいいか、単に視察のつもりでも無意味じゃないぞ。

禹徳淳　どうせ明日一日ここにぶらぶらしていたってしようがない。

安重根　それにハルビンは軍隊が多いし、いざとなると近づけないかもしれない。ことにココ

フツォフも来ている。警戒は倍に厳重なわけだ。

　曹道先を案内に劉東夏が駈け上って来る。

劉東夏　（息を切らして）蔡家溝で三十分停車するそうです！　はっきりわかりました。この先の蔡家溝です。あすこだけ複線になっているので、臨時列車なんか三十分以上停車するかもしれないと言うんです！

安重根　（きびきびした口調）護照のほうはどうだ。大丈夫か。

禹徳淳　東夏君にすっかりやってもらってある。

安重根　汽車はまだあるな。

劉東夏　急げば間に合います。

禹徳淳　蔡家溝までか。

安重根　馬鹿言え。どうなるかわからない。三夾河まで買わせろ。

　と先に立って急ぎ物乾しを降りかける。

禹徳淳　（続いて）写真を撮しておけばよかったなあ、君と僕と――。

安重根　写真なんか、まだ撮せるよ、明日蔡家溝ででも。

　金成白が駈け上って来て、上り口で衝突しそうになる。

金成白　（安重根へ）先生、いよいよ――。

安重根は無言で、力強く金成白と握手する。「三夾河行き」、「いや、蔡家溝で下車」、「三人で停車場まで走るんだ」など安重根、禹徳淳、劉東夏の三人、口ぐちに大声に言いながら勢いよく屋根を降りて行く。柳麗玉も勇躍して、見送りに走り下りる。曹道先と金成白は手摺りに駈け寄って下を覗く。

12

翌二十四日、深夜。蔡家溝駅前、チチハル・ホテル。

木賃宿の如きホテルの階上の一室。灰色の壁、低い天井、裸かの床（ゆか）、正面に廊下に通ずる扉（ドア）、ドアの傍に椅子一つ。窓はなし。片隅に毀れかかった鉄製の寝台が二つあるのみ、他に家具はない。

安重根、禹徳淳、劉東夏、蔡家溝駅長オグネフ、同駅駐在中隊長オルダコフ大尉、同隊付セミン軍曹、チチハル・ホテル主人ヤアフネンコ、支那人ボウイ、兵卒、ロシア人の売春婦三人、相手の男達。

隅に二つ並んだ寝台に、安重根と禹徳淳が寝ている。禹徳淳は鼾を立てて熟睡し、安重根はしきりに寝返りを打つ。寝台の裾に二人の衣類が脱ぎ懸けられ、安重根のベッドの下には、ウラジオから持って来た行李が押し込んである。扉の傍の椅子に、大きな外套を着て劉東夏が居眠りしている。薄暗い電燈。廊下の時計が二時を打つ。長い間。ドアが細目にあいて、ロシア人の女が覗き込む。劉東夏の眠っているのを見すまし、そっと手を伸ばして鼻を摘もうとする。劉東夏は口の中で何か呟いて払う。

女　（低く笑って）門番さん！　ちょいと門番さんてば！　何だってそんなところに頑張ってんのさ。寒いわ。わたしんとこへ来ない？　はいってもいい？

劉東夏は眼を覚ます。

女　（小声に）まあ、あんた子供じゃないの？　可愛がって上げるわ。いらっしゃいよ。あたしの部屋へさ。廊下の突き当りよ。

劉東夏　いけないよ、そんなところから顔を出しちゃあ。叱られるぞ。

禹徳淳が寝台に起き上る。女はあわててドアを閉めて去る。

禹徳淳　また淫売かい。
劉東夏　（笑って）ええ、あいつとてもうるさいんです。
禹徳淳　何時だい。
劉東夏　さあ――今三時打ったようですよ。
禹徳淳　かわろうか。
劉東夏　いいんです。もう少ししたら――。
禹徳淳　起したまえ。かわるから。
　禹徳淳が再び寝台に横になると同時に、弾かれたように安重根が起き上る。
安重根　ひどい汗だ。（腋の下へ手をやって）こんなに寝汗をかいている。
禹徳淳　（ベッドから）よく眠っていたよ。君は朝までぐっすり眠らなくちゃあ。僕と劉君が代り番こに起きているから大丈夫だ。
　安重根もふたたび枕に就き、劉東夏は戸口の椅子で居眠りを続け、しんとなる。長い間。
安重根　（独り言のように、突然）徳淳、君は黄海道のほうはあんまり知らないようだねえ。（間。禹徳淳は答えない）僕のおやじは安泰勲と言って、黄海道海州の生れさ。科挙に及第し

て進士なんだ。（長い間。次第に述懐的に）そうだ、僕の家に塾があってねえ、あのポグラニチナヤの趙康英や、ハルビンの金成白、それに僕の弟の安定根と安恭根など、みんな一緒に漢文を習ったものさ。童蒙先習、通鑑、それから四書か。はっはっは、勉強したよ。（間）その後僕は、信川で、天主教の坊さんで洪神文と言ったフランス人に就いてフランス語を教わったこともある。僕の家はみんな天主教だが、僕が洗礼を受けたのはたしか十七の春だった。うむ、洪神文というんだ。君は識らないかなあ。

禹徳淳は空寝入りをして鼾をかいている。長い間がつづく。

安重根　おやじの安泰勲が倹約家で、少しばかり不動産があってねえ、鎮南浦に残して来た僕の家族は、それで居食いしているわけだが、それも、今では二三百石のものだろう。故里を出たきり補助するどころではないから、さぞ困っているだろうと思うよ。

叩戸といっしょにドアを蹴り開けて、蔡家溝駅駐在セミン軍曹と部下四五人が、支那人ボウイを案内に荒々しく踏み込んで来る。

軍曹　（大喝）起きろ！　検査だ！

安重根と禹徳淳は起き上る。劉東夏は椅子を離れて直立する。兵卒たちは早くも室内を歩き廻って、衣類や手廻品に触れてみている。

安重根　何だ。夜中に他人の部屋へどなり込んで来るやつがあるか。何の検査だ。

軍曹　（大声に）何だと？　生意気言うな。何の検査でもよいっ！　日本の高官が当駅を御通過になるので失礼のないように固めているんだ。（安重根へ進んで）貴様は何者か。

禹徳淳　（急いで寝台を下りて）済みません。わたくしどもは飴屋でございます。こいつは宵の口に一杯呑って酔っておりますんで、とんだ失礼を申し上げました。（懸命に安重根へ眼配せする）

軍曹　飴屋か。道具はどこにある、道具は。

禹徳淳　はい。道具は、預けてございます。

軍曹　どこに預けてあるのか。

禹徳淳　この町の親方のところに預けてございます。

軍曹　たしかにそうだな。嘘をつくと承知せんぞ。儲かるか。

禹徳淳　へ？

軍曹　飴屋は儲かるかと訊いているんだ。

軍曹は安重根を白眼みつけて、部下を纏めてさっさと出て行く。支那人のボウイが、その背ろ姿に顔をしかめながら扉を閉めて続く。

禹徳淳　笑わせやがらあ。あんでえ！　威張りくさりやがって。まるで日本人みてえな野郎だ。

（劉東夏へ）驚いたろう。

安重根　（寝台に腰掛けて）僕は徳淳が羨しいよ。明日にも、世界中がびっくりするようなことをやろうというのに、とっさに上手に飴屋に成り済ましたりなんか――神経が太いぞ。

禹徳淳　（勢いよく寝台に滑り込んで、大声に）そうだ！　いよいよおれたちがやっつけたとなると、騒ぎになるぜ。××戦争の戦端を切るんだ。愉快だなあ！

安重根　××戦争？　不思議なことを言うねえ。誰が戦争をするんだ。

禹徳淳　何を言ってるんだ。おれたちが敢然と起ったのを見て、鶏林八道から露領、満洲にかけての同志が安閑としていると思うか。大戦争だよ。これは、大戦争になる。

安重根　（哄笑）笑わせないでくれ。だから僕は、君が羨しいと言うんだ。

禹徳淳　（むっくり起き上って）何？　じゃあ、安君、君は、同志が僕らを見殺しにするとでも考えているのか。

安重根　（話題を外らすように、劉東夏へ）十二時ごろに汽車の音がしたねえ。夢心地に聞いていた。

禹徳淳　（激しく）安君！　君は同志を信じないのか。

劉東夏　（戸口の椅子から）あれは貨物です。

安重根　汽車はあれきり通らないようだねえ。（禹徳淳へ笑って）三夾河まで行った方がよか

ったかな。

禹徳淳　しかし、蔡家溝は小さな駅だが、列車の行き違うところで、停車時間が長いというから降りたんじゃないか。

安重根　（劉東夏へ）列車往復の回数はわかっていますね。

禹徳淳　（吐き出すように）もちろんここは大事を決行するに便利なところじゃないよ。見慣れぬ人間がうろついていると、眼についてしようがない。三人なんか張り込んでいる必要はないんだ。

先刻の支那人ボウイを従えて駅長オグネフがはいって来る。

駅長　（にこにこして）ちょっと調べさせて頂きます。

禹徳淳　（俯向けに寝台に寝転がる）またか——うんざりするなあ。

駅長　（劉東夏を見て）あなたはなぜそんなところに掛けているんですか。

劉東夏　ベッドが二つしかないもんですから——。

駅長　なるほど。（禹徳淳へ微笑）このホテルは駅に接続しております関係上、私の管轄になっておりますんで、御迷惑でしょうが、お答え願います。

禹徳淳　はいはい、（元気よく起き上って肘を張る）答えますとも！　さあ、何でも訊いて下さい。

駅長　なに、ほんの形式ですよ。

安重根　先刻も軍隊のほうから審べが来ました。うるさくて寝られやしません。いったいどうしたというんです。

駅長　（とぼけて）さあ、何ですか、私どもは上司の命令で動いているだけですから――（禹徳淳へ）三人御一緒ですか。

禹徳淳　はい。そうです。

駅長　どちらからおいでした。

禹徳淳　旅の飴屋なんです。ハルビンから来ました。

駅長　これからどちらへ？

禹徳淳　明朝三奕河、寛城子の方へ発つつもりです。

駅長　ありがとう。お邪魔しました。

駅長去る。支那人ボウイは顔をしかめて随いて行く。駅長はただちにドアの真向うの部屋へはいって、同じことを言っているのが聞こえて来る。間。

禹徳淳　（安重根を凝視した後）君はどう考えているか知らんが、僕らは決して個人の挌で（低声に）伊藤を殺っつけるんじゃあないんだ。人数こそ尠いが、この行為は戦争だよ。立派な××戦争だよ。君は義兵の参謀中将として指揮をし、僕はその義軍に参加しているのだ。事

成れば、戦時の捕虜として潔く縛に就く覚悟でいる。

安重根　（続けさまに巻煙草を吹かして歩き廻りながら、苦笑）解った、わかった！　僕も今さらこんなことを言いたくはないが、本国では、外部も工部も法部も、いや、通信機関まですべて日本の経営なんだぜ。いまわかったことじゃないが、考えてみると、これじゃとても大仕掛けに事を挙げるなんて思いも寄らない。例えば、ここで僕らが何かやったって、果して僕らの目的、僕らの意思が、大衆に徹底するかどうか――。

禹徳淳　（顔色を変える）おいおい、今になって君は何を言い出すんだ――。

安重根　（冷笑して）また徳淳のお株が始まるぞ。そのつぎは、（大言壮語の口調で）「われにしてもし武力あらば、軍艦に大砲を積んで朝鮮海峡へ乗り出し、伊藤公の乗って来る船を撃ち沈める」――という、いつもの、そら、十八番が出るんだろう。

禹徳淳がむっとして何か言わんとする時、室外の廊下に「嫌ですよう、引っ張っちゃあ！　行きますよ。行ったら文句はないんでしょう。」と叫ぶ肝高い女の声、「来いっ！　貴様も一緒に来るんだ！」などと男の怒声、続いてけたたましい女の泣き声と、多人数の走り廻る音がして、突然ドアが開き、寝巻姿のロシア人の売春婦三人と、客の朝鮮人支那人の男たちが逃げ込んで来る。劉東夏と禹徳淳は呆然と見守っている。安重根は寝台の下から行李を引き出して、茶色のルバシカ、同じ色の背広、円い運動帽子、大きな羊皮外套等、ウラジオで調えた衣類を取り出し、片隅で静かに着がえにかかっている。

が、誰も気がつかない。

女一　（禹徳淳へ低声に）ちょっと此室を貸して下さいね。侵入者一同は部屋の三人に頓着なくささやき続ける。

男一　いや、あわてた、あわてた。眼も当てられやしない。

女二　サアシャさんはやられたらしいわね。

男二　ざまったらないよ。今夜にかぎってばかに脅かしやがる。

女三　えらい人が汽車で通るからって、家の中で何をしようとかまわないじゃないのねえ。

男三　憲兵のやつ何か感違いしてるらしいんだ。とんだ災難だよ。

女一　（耳を澄まして）しっ！

口に指を当てる。ドアが細く開いてホテルの主人ヤアフネンコの禿頭が現れる。

女一　あら、ヤアフネンコのお父つぁん、もう大丈夫？

ヤアフネンコ　やれやれ、一組挙げて帰ったらしいよ。そっと部屋へ帰んな。静かに——いいか、静かにな。

女たちは銘めいの男を伴って音を忍ばせて出て行く。

ヤアフネンコ　（ドアから顔だけ入れて）お騒がせしましたな。はい、お休みなさい。
禹徳淳　（安重根が着がえしたのに気づいて愕く）なんだい、今からそんな物を着込んで。
（駈け寄る）どこへ行くんだ？
安重根　（着がえを済まして）おれは嫌だよ。（戸口へ進む）ハルビンへ帰るんだ。
禹徳淳　（血相を変えて追い停めようとする）安重根！　君――なにを馬鹿な！
安重根　何をするんだ！　（振り払う）
禹徳淳　（激昂して）貴様、貴様――変節したな。裏切るつもりか。
安重根　（ドアの前で振り返って、静かに）変節も裏切りもしない。おれはただ、もう伊藤を殺してしまったような気がするだけだ。
禹徳淳　（呆然と佇立していたが、気がついたように戸口（ドア）へよろめいて立ち塞がる）それは何のことだ。
安重根　（冷然と）伊藤を殺してしまったような気がして、淋しくて仕様がないんだ。僕はハルビンへ帰るよ。
禹徳淳　ようし！　（怒りに顫えて掴みかかろうとし、どなる）卑怯者！　卑怯だ。こいつ――！
安重根　（禹徳淳の手を抑えて一語ずつ力強く）徳淳！　いいか、伊藤は、おれの伊藤だぞ。

おれだけの伊藤だぞ。殺るならおれ自身やらなくちゃならない必要があってやるんだ。が――。

禹徳淳　（じっと睨んで）詭弁を弄すな、詭弁を。

安重根　殺そうと生かそうとおれの伊藤なんだ。おれがあいつを殺すと言い出した以上、今度は、助けるのもおれの権利にある。おれはあいつを生かしておこう！　殺すと同じ意味で助けるのだ！

言い終って禹徳淳を突き放し、身を翻して室外に出るや否、ドアを閉める。

禹徳淳　（劉東夏へ）外套を取ってくれ！　外套のポケットにピストルがあるんだ。畜生！　射ち殺してやる。警察へ駈け込むかも知れないから、早く――。

劉東夏があわてて寝台に掛けてあった外套を持って来て渡す時、扉がいっぱいにひらいて、警備中隊長オルダコフ大尉が、兵卒四五名と何食わぬ顔のヤアフネンコ、支那人ボウイを随えて厳然と立っている。

大尉　（ヤアフネンコへ）飴屋というのはこいつらか。三人と聞いたが二人しかおらんじゃないか。（はいって来る）貴様ら朝鮮人だろう。出ることならん！　特別列車が通過するまで明日一日この部屋に禁足だ！　待て！　今、一応身体検査をする。

大尉の合図を受けて兵卒たちがのっそりとはいって来る。劉東夏はぼんやり立ち竦み、

禹徳淳は驚愕して背ろへよろめく。

13

十月二十六日、朝。東清鉄道長春ハルビン間の特別列車、食堂車内。

金色燦然たる万国寝台車（ワゴンリイ）の貴賓食堂車内部。列車の振動で動揺している。正面一列の窓外は枯草の土手、ペンキ塗りの住宅、赤土の丘、牧場、松花江（スンガリイ）の水、踏切りなどのハルビン郊外。近景は汽車の後方に流れるように飛び去り、遠景は汽車について緩く大きく廻る。車内は椅子卓子を片付けてリセプション・ルウムのごとく準備してある。車輪とピストンの規則正しい轟音。車窓の外の明徹な日光に粉雪が踊っている。

伊藤公出迎えのため便乗せる東清鉄道民政部長アファナアシェフ少将、同営業部長ギンツェ、護境軍団代表ヒョウドロフ大佐、他二三の露国文武官。ハルビン総領事川上俊彦、日本人居留民会会長河井松之助、満鉄代理店日満商会主、他二三。日露人すべて礼装。

一同が下手の車扉に向って立ち、無言で慎ましやかに待っているところへ、満鉄総裁中

村是公、同理事田中清次郎、同社員庄司鐘五郎を伴い、濃灰色（オックスフォード・グレイ）のモウニングに、金の飾りのついた握り太のステッキをついた伊藤公がドアに現れる。人々は静かに低頭する。伊藤公は庄司に扶けられて車室の中央に進む。その時葉巻用のパイプを取り落す。庄司が急いで拾って恭しく手に持っている。伊藤は葉巻を手に、にこやかに人々を見廻す。

アファナアシェフ少将　（きらびやかな軍服。伊藤の前に進んで）公爵閣下には御疲労であらせられましょうが、到着前に一場のお慰みにもなりましょうし、またお見識りの栄を得たく、御出席を願いましたるところ、幸いに御快諾下さいまして、光栄に存じます。東清鉄道民政部のアファナアシェフと申します。（握手する）

伊藤　自分がこのたびハルビンを訪問致すのは、なんら政治外交上の意味があるのではなく、ただ新しい土地を観、天下の名士ココフツォフ氏その他に偶然会見するのを楽しみにして行くに過ぎませぬ。

庄司が背後から椅子を奨めるが伊藤は掛けない。

伊藤　一度見ておきたいと思った満洲に、政務の余暇を利用し、皇帝陛下の御許可を得て視察

の途に上ると、たまたま自分のかねて尊敬措く能わざる大政治家たる貴国大蔵大臣が、東洋へお出ましになるということで、途もさして遠くはなしお眼にかかりたいと思いついて何の計画するところもなく、いささか日露親和の緒にもならんかと思うて罷り出で、計らずもここに諸君にお眼にかかることのできたのは、余輩のまことに満足に思うところである。従来自分は、日露両国間にいっそう親密なる関係の進展する必要を感ずる、いたって切なるものでありますが、どうかこの親和の関係が、敬愛する諸君と同席の栄を得たるこの汽車の中に始まって、汽車の進むがごとく、ますます鞏固なる親交を助長するように期したいのである。諸君の健康を祝したいのでありまするが、朝であるから酒杯は略しましょう。

ギンツェ営業部長　（一揖して）公爵閣下の仰せのとおり、いかなる障害、いかなる困難がありましても、吾人は決して、その困難、はたまた障害のために、両国の親交を損ずることはあるまいと信じます。

伊藤　（ちょっと鋭くギンツェを見て）これは珍しいお説である。（すこし不機嫌そうに）いや、障害、困難のごとき、余輩は老眼のせいか、さらにこれを認めませぬ。日露両国の関係は、この列車の疾走するがごとく、益ます前進しつつあるように見受けられる。（すぐ微笑して）余は露人を愛す。（ギンツェと握手する）

伊藤はこの「ヤ・リュブリュウ・ルウスキフ」を棒読みに、不器用に繰り返しながら、順々に握手する。一同微笑する。

14

パントマイム

同日午前九時、ハルビン駅構内、一二等待合室。

正面中央に改札口ありて、ただちにプラットフォウムに続く。改札口を挟んで、左右は舞台横一面に、腰の低い硝子窓。下手奥、窓の下にストウブを囲んで卓子と椅子二三脚。混雑に備えて取り片づけて、広く空地を取ってある。壁には大時計、列車発着表、露語の広告等掛けあり。下手は食堂（バフェ）の売台、背後に酒壜の棚、菓子の皿などを飾り、上手は三等待合室に通じている。

正面の窓の外はプラットフォウム、窓硝子の上の方に向うの線路が見える。寒い朝で雪が積もり、細かい雪が小止みもなく、降りしきっている。

窓のすぐ外、改札口の右側に露国儀仗兵、左側に清国儀仗兵が、こっちに背中を向けて

一列に並んでいるのが、硝子越しに見える。

舞台一ぱいの出迎人だが、この場は物音のみで、人はすべて無言である。礼装の群集がぎっしり詰まって動き廻っている。そこここに一団を作って談笑している。知った顔を見つけて遠くから呼ぶ。人を分けて挨拶に行く。肩を叩いて笑う。久濶を叙している。それらの談笑挨拶等、その意(こころ)で口が動くだけでいっさい発音しない。汽車を待つ間のあわただしい一刻。群集の跫音、煙草のけむり、声のないざわめき。

美々しい礼服の日清露の顕官が続々到着する。その中に露国蔵相ココフツォフの一行、東清鉄道副総裁ウェンツェリ、同鉄道長官ホルワット少将、交渉局長ダニエル、清国吉林外交部の大官、ハルビン市長ベルグなどがいる。ボンネットの夫人連も混っている。日本人側は居留民会役員、満鉄代理店日満商会員、各団体代表者、一般出迎人。及び各国領事団。

日本人が大部分である。将校マント、フロック、モウニング、シルクハット、明治四十二年の紳士。和服も多い。紋付袴に二重廻し、山高帽。婦人達もすべて明治の礼装だ。群集は縦横に揺れ動いて、口だけ動く無言の歓談が続く、特務将校ストラゾフと領事館

付岡本警部が、駅員を指揮して整理に右往左往している。出迎人は、後からあとからと詰めかけて来る。写真班が名士の集団に八方からレンズを向ける。

やがて鈴(ベル)が鳴ると、ココフツォフを先頭に一同ぞろぞろと、改札口から舞台の、奥の雪で明るいプラットフォウムへ出て行く。遠くから汽車の音が近づいて来ている。群集は改札口を出て雪の中を左右のプラットフォウムに散る。汽車の音はだんだん近く大きくなる。出迎人はすっかり改札口を出て待合室は空になる。改札口には誰もいない。ただ一人、下手窓下の椅子に安重根が掛けている。今まで群集に紛れて観客の眼にとまらなかったのだ。卓子に片肘ついてぼんやりストウブに当っている。茶いろのルバシカ、同じ色の背広、大きな羊皮外套、円い運動帽子。何思うともなき顔。ただ右手を外套のポケットに深く突っ込んでいるのはピストルを握り締めているのだ。

誰もいない待合室だ。安重根は無心に、刻一刻近づいて来る汽車の音に、聞き入っている。長い間。轟音を立てて汽車がプラットフォウムに突入して来る。耳を聾する響き。窓硝子を撫でて沸く白い蒸気。プラットフォウムとすれずれに眼まぐるしく流れ去る巨大な車輪とピストンの動きが、窓の上方、人垣の脚を縫って一線に見える。幾輛か通り過ぎて速力は漸次に緩まり、音が次第に低くなって、停車する。正面、改札口向うに、

飴色に塗った貴賓車が雪と湯気に濡れて静止している。号令の声が聞こえて、露支両国の儀仗兵が一斉に捧げ銃する。

同じに喨々たる奏楽の音が起って、しいんとなる。安重根は魅されたように起ち上る。右手をポケットに、微笑している。そのまま前へよろめく。だんだん急ぎ足に、改札口からプラットフォウムへ吸い込まれるようにはいって行く。

青空文庫情報

底本：「一人三人全集1［#「1」はローマ数字、1-13-21］時代捕物釘抜藤吉捕物覚書」河出書房新社
　　1970（昭和45）年1月15日初版発行
初出：「中央公論」中央公論社
　　1931（昭和6）年4月
※林不忘名義の底本に収録されていますが、発表時の署名は谷譲次です。
※改行行頭の人名、及び「時。」「所。」「人。」は、底本では、ゴシックで組まれています。
※ト書きは、底本では、小さな文字で組まれています。
※「ボグラニチナヤ」と「ポグラニチナヤ」の混在は、底本通りにしました。
入力：奥村正明
校正：松永正敏
2003年8月20日作成
2008年9月30日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られまし

た。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

安重根
——十四の場面——

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　林不忘
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/